眼球職人デラ

病葉　雨月

眼球職人デラ

目次

序　章　蠢く土塊『レムの寝言記』より……三
第一章　瞽女（ごぜ）の宿……四
第二章　幻視旅行……四六
第三章　誰がために鐘は鳴る……八一
第四章　眼球職人デラ……一四七
終　章　獣ノ微睡火（まどろび）……一七一

序　章、蠢く土塊『レムの寝言記』より

荒涼とした大地があった。
砂塵が舞い、冷風が啼く、どこまでも空虚な世界があった。
地面には黒い亀裂が走り、その隙間から、畸形の樹木が顔を覗かせている。
寂寥として漂う灰色の空の下、それらは苦患を象るかの如く歪に根を張り巡らせていた。
と、霞む視界の先で何かが動く。
それは土塊。絶え間なく蠕動を繰り返す、命であって、命でないもの。
それは泥塊。凹凸を生やした、形であって、形でないもの。
それは肉塊。這い進む、個であって、個でないもの。

第一章、瞽女（ごぜ）の宿

少年の視界が激しく明滅をくりかえす。
彼は湿った土砂とともに森の斜面を転がり落ちていた。
痛みと混乱、苦鳴と悲鳴……抗うすべもなく、彼のからだは霧の深い谷底へと真っ逆さまに飲まれていった。闇夜に揉まれながら、五本の指がむなしく空気をつかみとる。と、視界が暗転するそのまぎわ、彼の右目に何かが迫った。それが岩壁から伸びる一本の鋭い木の枝だと判明した瞬間、すべてが深紅色に染まっていた。

※※※

ハッ――として目を覚ます。
汗があご先をつたってながれ落ち、膝にかけられたシーツへと染みこんでいく。
しばらくは声も出せなかった。五感が夢と現のはざまをさまよい歩き、シビれた脳がただただ不明瞭な空間を泳いでいた。彼の意識はしばし微睡（まどろみ）の中にあったが、徐々に、その瞳に光が灯っていく。

「……ここは……」
と、彼は時間をかけてようやく言葉をとりもどした。
しかし息をつく暇もなく、彼は眼前の光景に戸惑いを示す。
そこは極彩色に飾られた濃密な部屋だった。右を向けば巨大な棚がそびえ立ち、整然と並ぶガラス瓶の中で得体のしれない物体が浮いている。また左を向けば、壁に張られた無数の張り紙が目に入り、解読不能の言語と気味の悪い挿絵の群れが彼の心を惑わせた。さらに、上を向けば過剰な電飾に目が眩み、下を向けば敷物の幾何学模様に目が眩む。
少年は指で目頭を押さえようとした。
が、それはできなかった。
彼のからだは巨大な虫のような椅子に固定されていたのだ。
再度あたりを見回してみると、部屋のすみには悪魔や幻獣を象った不気味な彫像が置いてある。天井からはゾッとするほど美麗な布切れが何本も垂れ下がっていた。そして、傍らにあるテーブルの上には、血のついた銀食器の数々が並べられている。
少年のノドがゴクリと音を立てた。
ここはどこで、何が、どうなっているのか。
周囲を観察すればするほど謎は深まるばかりだった。
そんな中、少年は向かいの壁に古めかしい鏡が掛けられているのに気づいた。そこにうつる

自分の姿に、彼はアッと小さな声をあげる。額から右目にかけて包帯が巻かれているのだ。そしてその白い布のちょうど瞳にあたる部分が赤黒く汚れている……。

とたん、彼の意識は激しく過熱した。

――耳をつんざく息づかい。

――鼻を腐す強烈な悪臭。

――焼けつく肌の感覚。

――悶え痺れる舌。

「おや、お目覚めかな？」

突然の問いかけに、呻いていた少年は反射的に顔をあげた。

いつのまにか、部屋の中にひとりの女が立っていた。漆黒のマントをまとうその姿はまるで異端で、さながら魔女のようである。頭にのせたキャペリンハットの庇（ひさし）は大きく、彼女の目もとを隠していたが、そこから流れるうねりを帯びた長い髪の毛はこの世に非ざる美麗な紫水晶（アメジスト）色を呈していた。そしてまた、肩に羽織った金刺繍のケープレットや、帽子の縁にあしらわれた銀の羽根かざりと宝石類、そのほか指輪にペンダントなどなど、ちりばめられた装飾品の数々が彼女の曲線美をより眩惑的なものにしていた。

「気分はどうだい？」
「……」
少年は言葉を出せずにいた。
すると、女が一歩、また一歩と近づいてくる。そして少年のそばまでくると、彼女はテーブルに並べられた銀食器を手にとり、高級そうなハンカチーフでその一本一本を丁寧に拭っていった。彼女は再び少年に話しかけたが、少年はやはり答えられなかった。
「そう怖がらないでくれ。君を食べたりはしないさ」
口の端をつりあげて、女は微笑する。
彼女は手作業を続けながら、ことここに至るまでの経緯を話し出した。
難しい話じゃない。要は川を流れてきた瀕死の少年を発見し、自分の家で介抱していた、ということらしい。なるほど。そうであるなら、自分のこの姿にも納得がいく。異様な雰囲気につい思考が鈍くなっていたが、冷静に考えてみればたしかにそう考えるのが妥当だろう。そう思った少年は彼女に謝意を示した。
「助けてくださってありがとうございます」
「気にしないでくれ、当然のことをしたまでさ」
彼女はそう言って、少年の頭に巻かれた包帯をするすると外していく。
されるがまま、少年はふと思いついた疑問について尋ねていた。

「なぜ僕の体からだは椅子に固定されてるんでしょうか？」
「それはほら、危ないからね。動かれるとさ」
「危ないっていったいなんんん――」
瞬間、少年の右目に銀飾のスプーンが突っ込まれた。

悲鳴を上げる暇もなかった。
女は突き刺したスプーンを少年の眼窩（がんか）の中でぐるりとひねり、彼の目玉をすばやくえぐり出してしまう。麻酔でも効いているのか、痛みはない。しかしながら、自分の眼球が十数年はまっていた場所から摘出された感覚は筆舌に尽くしがたく、少年はあまりの気持ち悪さに胃が痙攣し、吐きそうになっていた。
「見たまえ、これはなかなかひどい傷だ」
少年の心情を歯牙にもかけず、女はひとりでほくそ笑む。
気が触れそうだった。いま、自分の右目が、左目の前にある。ぬらぬらと光沢を放つその見慣れたようで見慣れぬ球体は、女が持つスプーンの上にごろりとのせられていた。白い球面に這いまわる血管が脈打っているのは、はたして目の錯覚だろうか。常軌を逸した光景に、卒倒しないのが不思議だった。
「あなたは……あなたはいったい何を……」

少年がかすれた声を上げる。
と、彼女は言った。
「私は眼球職人デラ。瞽女の宿へようこそ」

※※※

カッチカッチカッチカッチ――時計の針が時間を裁断していく。
少年はティーカップに注がれた緑色の液体を見つめていた。この毒々しい色合いというのはどうにも飲む気を失くしてしまう。しかしながらひとくちすすってみると、なんとも馥郁としたさわやかな香りが広がってゆき、脳に心地よい快感を与えてくれるのだ。そして舌の表面からなめらかで繊細な甘みが伝わり、先の快感がまた一段と深く、鮮明になっていく。
「美味しいかい？」
「はい、とても。クェルの涙でしたっけ？」
「そう。鎮痛作用もあるからゆっくり飲むといい」
そう言って、デラは優しく微笑んだ。
さて、少年があの奇怪な椅子から解放されたのは、結局、例の自己紹介から数日後のことだった。眼球をいきなりえぐられるという事態に一時は恐怖した彼だったが、それはあくまで医

学的な処置であり、そこに邪な意図はないらしい。たしかに、取り出した眼球には見るも無残な傷がついていた。これをあのまま眼窩にはめ続けていたら、傷口から化膿して大変なことになっていただろう。彼女はそれを見越して、あの驚きの行為に出たのだ。しかも驚くべきことに、彼女はその壊れた眼球を治し、以前と変わらぬ状態に戻してくれるというのだ。

「あの、本当に治るんでしょうか？」

「まかせてくれたまえ。私は眼球職人だからね」

少年の問いに、黒衣の淑女はその豊満な胸に手をあてて言う。

眼球職人――その言葉は謎に満ちていた。

訊けば、眼科医とも違うらしい。だが、謎はそれだけじゃなかった。彼女をとりまくこの空間、そう、瞽女の宿と呼ばれるこの場所が大きな謎に満ちていた。東洋とも西洋ともつかぬ意匠の屋敷はまるで迷宮だった。扉を通りぬけていくたびに、部屋の雰囲気が脈絡もなくガラリと変わるのだ。

例えば、黄金に輝く宮殿風の通路を歩いていたと思ったら、扉をあけた瞬間、眼前には薄暗い屋根裏部屋が広がっているのだ。そしてその屋根裏部屋を進み、次の扉に手をかけると、今度は階段の踊り場が現れる。ふりかえれば、踊り場にかけてあった巨大な絵画の一部が隠し扉のようになっていて、自分はそこから出てきたのだと少年は度肝を抜かされた。

また、彼は何をどう間違えたのか、気づけば水晶が生える地下坑道のような場所に迷い出て

しまったこともある。幸いにも、どこからともなくやってきた青白い火の玉を追いかけていたらいつのまにか自室の前へと戻っていたが、あのときばかりは本当にもう戻れないのかと不安になった。

とまぁ、屋敷の中ではいろいろと奇怪なことがあったりもしたが、しかし、不思議と居心地は悪くなかった。運ばれてくるごはんは美味しかったし、温泉は広々として、疲れた心身を癒してくれた。たまにすれちがう宿泊客はガス状だったり、のっぺらぼうだったりと驚かされたが、なかでも一番の驚きは、ここの女主人である彼女がこの世を造った創世の大魔術師だということだった。

「なんだか、実感がわきませんね」

「実感？　実感とはいったい何のだい？」

「だって、目の前にいるのが神さまだなんて……」

少年は向かいに座る女へと視線をうつす。

彼女はいま、高そうなティーカップに銀職のスプーンを差し入れ、クェルの涙をくるくると優雅にかき混ぜていた。彼女こそが、神さまらしい。彼女は昔、四人の魔術師と共にこの地を訪れ、海をつくり、山をつくり、そして人をつくり出した創世の大魔術師だというのだ。もちろん、少年は心の底からそれを信じているわけではなかった。あいさつ代わりの冗談だろうと思っていた。とはいえ、彼女のその常人らしからぬさまや瞽女の宿で起こる怪異現象の数々を

いざ体験してみると、あながち嘘ではないのかも、という気持ちになってくる。
「ははは、神さまなんて崇高なものじゃないさ。そうかたくならないでくれ」
「お言葉に甘えようとは思いますが、あまり期待しないでくださいね」
少年は困ったように微苦笑を浮かべていた。
そんな少年に、デラは思い出したように尋ねる。
「ところで、記憶の方はどうだい？」
「それが、まだ、なにも……」
少年は首をよこにふる。
ここにきてからの一番の問題がこれだった。彼女曰く、一時的な記憶喪失らしい。少年は崖から落ちる前のことを何ひとつ覚えていなかった。自分がどこのだれで、そしてどうして崖から落ちたのか……思い出そうと考えはじめると、右の眼窩で閃光がほとばしる。まるで頭蓋をハンマーで叩かれたような痛みだった。
「……っつぅ……」
「無理することはない。ときがくれば思い出すさ」
「でも、治るまでここに泊めていただくというのはさすがに……」
「いやなに、袖振り合うも多生の縁と言うだろう。右目の修復にもまだ少し時間がかかりそうだし、それにうちは宿屋だからね。部屋ならいくらでもある。それでも君の気がすまないとい

うのなら、そうだな、ちょこちょこお手伝いでもしてもらおうかな」
「えぇ、そのさいはぜひおっしゃってください」

※※※

部屋に戻った少年がベッドに腰をおろす。
背を倒して横になると天井が目に入った。天井はドーム状に奥まっており、なかなか手の込んだつくりになっている。自称とはいえ、神さまが経営する宿屋なのだから手が込んでいて当たり前だろう。吊り下げられた電燈はオシャレで、機能美と造形美をかねそなえた不思議な味わいがあった。
その暖かな光を見つめながら、彼は思う。
自分はいったい何者なのか。ひとりでいると、ふと考えてしまう。
身なりからしてそうたいした者じゃないだろう。ブラウンのシャツにダークグリーンのデッキジャケット、そしてインディゴブルーの長ズボン……どれも布自体が傷んでおり、色もくすんで落ちていた。ベルトと靴に至っては、革が裂けそうなほどガタがきている。どちらかといえば貧困層の風貌だ。鏡にうつる瞳と髪の毛もまた、彼の歩んできた日々をあらわすかのように暗い灰色を呈している。

「ときがくれば……か」
彼は右目の空洞に手を添え、ためいきをひとつ吐いた。
すると、そのあとを追うように、部屋の中で弦のはじける音が響きはじめる。
語りかけるかのような異国の言葉がながれ出し、少年はそっと目を閉じた。それは不思議な旋律だった。優しくて、哀しくて、まるで、自分の魂をゆっくりと撫でられているかのような心地よさ……。
「もうこんな時間か」
時計を見ると、すでに夜も深まっている頃だった。
窓の外ではやせほそった月がひとつ、仄明るく浮かんでいる。
ここに宿泊してからというもの、少年が気落ちしていると必ずどこからともなくメロディーがながれてくる。彼はそのたびに廊下へと出て屋敷の中をさまよったのだが、結局、その正体は分からずじまいだった。この屋敷には奇怪千万な異常事象がたくさんあった。これもそのひとつだ。そのすべてを書に記していたらきりがない。だから、いまはただ、月下にたゆたう小舟のように、そのなだらかな音の連なりに身を任せることにする。
唄は続き、宿泊者の心を夢の世界へと誘った。
そして最後の弦がはじけ、余韻がのこる。
曲は終わり、日が変わる。

※※※

翌日、少年は第一魔術工房と呼ばれる場所にいた。
デラに眼球職人の仕事場を見学しないかと誘われたのだ。
やることもなかった少年はすぐにその申し出を受け入れたのだが、さすがは創世の大魔術師を語るだけのことはある。眼前に広がる摩訶不思議な実験装置の数々に、彼はかるい眩暈（めまい）を覚えていた。石造りの壁には複雑な数式や六芒星などの図形が描かれ、作業台の上には丸底フラスコや試験官などのガラス器具がひしめき合っていた。器具の中には赤や緑などの色あざやかな液体が満ちており、気泡をブクブクと上げている。また部屋の天井には正体不明の骨格標本がひもで吊るされており、ゆらゆらとゆれ動いていた。その魚類に似た骨格標本がふとゆれるのをやめ、少年の方を向いたまま動かなくなる。と、頭蓋骨にあいた暗い眼窩の奥底に、不思議な青い光が灯り始めていった。
少年がワッと声を上げてとびのく。
彼は無意識のうちにデラへとしがみついていた。
腕と顔に、柔らかな感触と甘美な香りが伝わってくる。少年はちょっとだけその蠱惑的な魔力に魅了されていたが、すぐに正気を取りもどすと、今度はハッとしてとびのき、顔を赤くしながら謝った。

「す、すみません、つい、びっくりして……」
「怖いかい？　大丈夫だよ」
微笑して、彼女は少年の頭をなでる。
デラはそれから魔術の作業をどんどん進めていった。
彼女が銀飾のスプーンを作業台に打ちつける。すると、傍らに置かれていた魔術書がひとりでにその表紙をひらき、そのままバラバラとページをめくっていった。そしてあるところでピタリと止まると、彼女はそれを見ながら、フラスコや試験官に入っていた液体を次々と混ぜ合わせていく。出来上がった液体は濾過され、銀色の豪奢（ごうしゃ）な皿にゆっくりと注がれていった。彼女はその水面に向かって、不思議な呪文を唱えていく。
水面にゆらぎが走り、神秘的な漣が立つ。
と、彼女はそばで見ていた少年に向かって言った。
「少年、すまないが、そこのレバーを引いてくれないか？」
「これですか？　分かりました……」
少年は近くにあった赤銅色の機械に近づくと、言われたとおり、その機械から出るレバーを引いた。瞬間、機械が雄叫びを上げる。機械は小刻みに震え出し、細かな穴から白い蒸気を噴出させると、各部に取りつけられたガラス玉の中に小さな電光を発生させる。電光は放電と変色をくりかえしながら成長し、やがて美麗な紫水晶色に輝いた。

次いで、工房内に何者かの声が響きだす。
「――あはははは！　そんなに悲観することないってば！」
「――でも僕らだってもとはただの石なわけで、いずれ朽ち果てて……」
「――そもそも全能とは矛盾を宿す言葉であり我々は無意識に思考の檻へ身を――」
さわがしい声の主は、石窯だった。
見れば、作業台のうしろに並ぶ三つの石窯が窯口を動かしてしゃべっていた。ただの石窯が火をくべられたとたん、急に言葉を発し始めたのだ。彼らは火が勢いを強めていくのにつれてどんどん饒舌になっていく。その個性も豊かで、ひとつは楽観的に笑い、ひとつは悲観的に嘆き、そして最後のひとつは小難しい哲学的なことを延々とつぶやき続けていた。
「おはよう、アビー、グルトン、バスカミラード」
デラが石窯たちの名前を呼ぶ。
彼女の手には数枚の葉っぱが握りしめられていた。それは一見して平凡な野草のようだったが、その一枚が彼女の手からすりぬけて作業台の上に落ちた瞬間、作業台はバキバキと音を立ててひび割れていった。どうやら、見た目からは想像もできないほど、重いらしい。にもかかわらず、彼女はその超重力の葉を平然と持ち上げて、石窯たちの中にポイっと投げ入れてしまうのだった。
すると次の瞬間、工房に爆発音が鳴り響く。

石窯の中で、強烈な紫水晶色の轟炎がほとばしっていた。
「――あはははは！　人生、なるようにしかならないって！」
「――だとしても、意思をもってしまったら考えずにはいられない……」
「――感覚というのは外的環境の認識以外にも自己と意識を連結する重要な――」
逆巻く轟炎にあてられてか、石窯たちのおしゃべりも勢いを増していた。
そんなさなか、デラが木製の棚に手をかけながら声をもらす。
「しまった。ガラパンドの実をきらしていたか」
「ガラパンドの実？」
少年が訊き返す。当然ながら、聞いたことのない名前だった。
「あぁ、それがないと術式が完成しないんだが、私はここを動くわけにはいかないんだ。火を見てないといけないからね。目をはなしてるうちに飛び火なんてしてしまったら、屋敷どころかこの森を全焼させかねない。これはそういう火なんだ」
「――あはははは！　全焼！　全焼！　いいじゃん！　いいじゃん！」
「――全焼……それもいいかもしれない。いっそのことすべてを焼き払えば……」
「――恐怖、安堵、眩惑、生命は火に対して様々な感情を抱くものですが、それは――」
石窯たちがなにやら不穏なことを言っている。
と、デラが思いついたかのように少年へと提案する。

「そうだ、少年、ちょっとおつかいに行ってきてくれないかい？」
「僕ですか？　それは全然かまいませんが、どこに行けばいいんです？」
「庭の裏手の森の中だ。君ひとりじゃ迷うだろうから、案内役をつけるよ。ちょっとひねくれたやつだけど、悪いやつじゃない。頼りに――」
瞬間、石窯から大蛇のような轟炎が噴出し、デラの言葉をさえぎってしまう。
少年はあまりの熱風に吹きとびそうになっていたが、すんでのところでデラが盾となってくれたため、なんとか転ばずにすんでいた。見れば、彼女は銀飾のスプーンをかざし、うねり狂う轟炎たちを抑え込んでいる。
「それじゃあ、よろしく頼むよ」
「わ、わかりました！　頑張ります！」
「そうだ、少年、これを持っていきたまえ」
工房を出ようとする少年に対し、デラが何かを投げわたす。見ると、それは黒い布のようなものだった。少年は首をかしげて尋ねたが、彼女からの返答はなかった。どうやら、詳細を話している余裕はないようだ。燃え盛る三本の轟炎がまるで意思を持っているかのごとくのたうちまわり、デラに向かって猛然と火柱をあげている。
「すまないが、詳しくは案内役に訊いてくれ。この時間帯ならきっと庭園にある四つの噴水のどこかにいるはずだ。名前はオン――」

轟炎がみたび、噴きあれる。
彼女は会話をやめ、本格的に轟炎との戦いに身を投じた。

※※※

「噴水、噴水……」
少年はあれからすぐに庭園に足を運んだ。
庭園は広く、宿をとり囲むように造られていた。有能な庭師がいるらしく、景観は非常に美しかった。あざやかな緑が敷地一面に生いしげり、等間隔でつくられたレンガの花壇にはさまざまな花が咲いている。また、周囲に並ぶ人形のオーナメントや常緑樹のトピアリーはどれもが創造性にあふれ、何を元ネタにしているのか分からないものもあったが、どれを見ても気持ちが華やいだ。
「どなたかいませんか？」
少年の声が庭園にこだまする。
デラが言っていたように、噴水は庭園に四つあった。屋敷を中心に、それぞれ点対称になるように設置されている。俯瞰して見れば、ちょうど四角形の頂点の位置につくられていることになる。いま、少年はそのひとつずつを見てまわっているのだが、三基目にしてまだ案内役の

人には出会えていなかった。
「デラさんに言われてきたんですが！」
「おつかいを手伝ってほしいと。オン、オン――」
「やっぱ名前だけでもぜんぶ聞いておくべきだったかな……」
少年が頭をかきながらつぶやく。
と、どこからか金属のきしむ音が聞こえてくる。
音のする方向に歩いていくと、彼はやがて最後の噴水に行きついた。
そこにあったのはとりわけて美しい女神の彫像だった。今までの噴水もすばらしいものだったが、今度のもまた群をぬいてすばらしい。彼女は台座の上に佇み、背中から生える何枚もの翼を空中へと放射状に広げている。その優美かつ哀愁を帯びたさまは圧巻で、まるで生きているかのようだった。彼女は両手を胸の前に差し出し、手のひらにためた清らかな水を円形の泉へとそそいでいた。
そのとき、少年が噴水の近くで何かを見つける。
「……とりかご？……」
水をためる土台の上に、鳥籠がポツンと置かれていた。
それは黒を基調としたゴシック感のある意匠で、二段様式の形状と合わさることにより、どことなくお城のような外観を呈していた。また不思議なことに、檻の部分には細かな紋章が刻

まれたプレートが取りつけられていて、内部の様子は見えないように設計されている。
「なんでこんなところに……」
少年は何気なく持ち上げようとしてみた。
が、その鳥籠はまったく持ち上がらなかった。まるで土台に直接くっついているかのようだった。彼はなおも力を入れ続けたが、やはり、鳥籠は一ミリも動かない。少年は持ち上げるのをあきらめ、鳥籠の中をのぞきこもうと、プレートと檻のわずかな隙間に顔を近づける。その瞬間のことである。
「おいおい、のぞき見はよくねぇな」
少年は驚き、声をあげてしりもちをついていた。
「驚かせて悪かった。でも、姿を見られたくなくってね」
「いえ、こちらこそすいません。あまりに重かったので、つい気になって」
冷静をよそおっていたが、内心の動揺は言葉の端々にあらわれていた。もはやこの屋敷で何を見ようとおかしくはなかった。しゃべる石窯だって見たばかりなのだ。とはいえ、分かっていても、いきなりだとまだ慣れない。
「この鳥籠は特別製でね。人の力じゃまず動かせんさ」
立ち上がった少年に、鳥籠の主は続ける。
「で、オレになんの用だ？」

「えっ？」
「デラに言われてきたんだろ？」
そう言われて、少年はようやくピンときた。
「もしかしてあなたがデラさんの言っていたオン……」
「オンボロバードだ」
「はじめまして、僕はその……」
「別に名前なんていいさ。記憶喪失なんだろ？　だいたい聞いてるよ。ま、同じ屋根の下に住む者同士だ。おかたいのはナシにしようぜ。仲よくやろうや、ボウズ」

※※※

「なるほど、ガラパンドの実か」
「はい。それがないと作業が進められないとのことで」
「まったく、材料ぐらい先に確認しとけっていつも言ってんのに……」
オンボロバードはブツブツと不満をもらしていたが、断る気はなさそうだった。
彼は鳥籠の中でバサッと大きな音を響かせる。と、あのべらぼうに重たかった鳥籠がまるで重力を無視したかのように空中へと浮くのだった。いったいどういう原理なのかは分からない

が、考えるだけ無駄だろう。
「ついてきな、自生区域まで案内してやるよ」
少年は言われたとおり、彼のあとを歩いていった。

自生区域にはすぐについた。
噴水を出たあと、裏庭の門をぬけ、少し歩いたところにそれはあった。
そこは庭園のような整った場所ではなく、より自然観と野生味が色濃く残っている場所だった。あたりには背の高い樹木が生えており、枝から垂れさがる蔓が風にゆられている。足もとの草花もまた成長著しく、少年の行く手を阻むように生い茂っていた。
ガラパンドの実は綺麗な黒色をしているらしい。その光沢は果実でありながら宝石のように美しく、また、その見た目にふさわしくかなり貴重なもので、見つけ出すのには相当な運と根気が必要だとか。実際、探しはじめてから三十分ほど経っているが、いまだその果実は見つかっていなかった。
「どこにあるんだろう……」
「おう、眼帯の調子はどうだ？」
額の汗をぬぐっていると、近くにいたオンボロバードが話しかけてきた。
眼帯というのは、デラから持っていけと言われた例のあれのことだ。黒いマスクの正体は眼

帯だったのだ。しかもただの眼帯じゃない。視力を有する眼帯だ。つまり、これを目玉を失くした眼窩につけると、なんと見えないはず視界が見えるようになるのだ。
「すこぶる快調ですよ」
「そいつはよかった。見た目もなかなかイカしてるぜ」
「ちょっと物々しい気もしますけどね」
そう言って、少年はポリポリとこめかみをかく。
眼帯のデザインはなかなか恐ろしいものだった。生地は黒に輝く厚めの革素材で、右目を覆うはずの部分には円形の穴があいていた。穴には数本の鉄柱がはめこまれているため、まるで眼帯に丸い鉄格子の窓がついてるように見える。その奇抜で禍々しい造形は実に物騒な雰囲気を放っていた。左右にとりつけられたベルトを頭のうしろでとめて装着すると……自分の姿はまるでならず者のようだった。
「ところで、オンボロバードさん」
「なんだ？　別にさんはつけなくていいぞ」
「あの屋敷……瞽女の宿って言ってましたけど、あれは何なんですか？」
「瞽女ってのはなぁ、目の見えない女芸能者たちのことよ。村々を回りながら、楽器を演奏して唄う盲目の女旅芸人たちだ。で、村にやってきたそいつらを泊めてやる宿っていうのが瞽女の宿ってわけよ」

「じゃあ、ときどき聞こえてくる歌って……」
少年の頭の中に、あの不思議な旋律が思い出される。
「そのとおり。あの屋敷には旧き時代を生きぬいた瞽女たちの魂が住みついてる。そしてその宿に泊まっている俺たちも、ある意味ではその仲間だろう。お前だって何かが見えなくなったからここにきたのさ。こようと思ってかんたんにこられる場所じゃない」
「何かが見えなくなったから……」
「長い人生、生きてりゃいろいろあるわな」
オンボロバードの声が低くなる。彼もまた、少々わけありのようだ。
「この世界で眼球職人とかいう神さまなんてやってるあいつが、いったいどういう意図と経緯でそんな宿なんてはじめたのかは俺だって知らねえ。聞く気もねえしな。けどよ、つかれた足を休めるには悪くない場所だぜ。幸運なことに、瞽女の宿は無料だしな」
「たしかに……それもそうですね」
彼の冗談めいた言葉に、少年の頬が少しゆるむ。
が、次に発せられた彼の言葉に、その頬は引きつった。
「それと、宿泊者としての心がまえをひとつ教えといてやる。この屋敷にはいろいろな次元や世界から客が迷い込んでくる。だから、好奇心につられてむやみやたらと知らない部屋に入らん方がいい。たとえ扉があいていたとしてもだ。人のお前さんは特に肝に銘じとけ。泊まって

いる客によっちゃ、お前が今夜のディナーだと思われるぞ」

※※※

それから三十分が経過したが、ガラパンドの実はまだ見つからなかった。

オンボロバードはまだまだ序の口と言っていたが、少年は若干の焦燥感を覚えていた。おつかいもまともにできない男とは思われたくなかったのだ。そこで、彼はついにオンボロバードを説得し、二手に分かれるという作戦に出る。彼はここから少し離れたところにある、より森の奥深いところへ探しに行きたかったのだ。もちろん、オンボロバードはあまり遠くにいくなと忠告してきたが、少年の気持ちは逸るばかり。彼は何度も彼に頭を下げて、なんとか了承を得たのだった。

そうして向かった先は、思ったとおり今までとは雰囲気が違っていた。

植物たちの生命力が強く、樹木の本数も、蔓の長さも、草花の繁殖力もすべてがパワーアップしている。下から吹いてくる風に木々の葉がざわめき、ゆれ動く枝はまるで手まねきしているかのようだった。うす気味悪かったが、ここならいかにも見つかりそうである。少年はさっそく捜索を開始する。

草の根をかき分け、蔓の暖簾をくぐり、樹木を見上げてまわる。

そんなことを十回ほどくりかえしたときだろうか。
少年の目に、黒いかがやきがうつる。
それは聞きしに勝る美しさだった。一本の枝から垂れ下がる球形の果実。深い黒色にグリーンやブルー、ピンクなどの繊細なかがやきを反射させているその外観は、まさに黒蝶真珠（ブラックパール）さながらの美麗さだった。
少年はすぐさま樹にのぼりはじめた。枝はそれほど太くなかったが、意外にもけっこうしっかりしており、少年の体重でもしなるだけで折れそうにはなかった。とはいえ、油断は禁物である。彼は四つん這いになりながら、慎重に枝の先へと進んでいった。そして少年の手が果実に近づき、ふれる。
その直前、彼のからだは石のように固まっていた。
視線の遠く先には数名の人影があった。彼らの姿は実に奇妙で、大きな白い布を頭からかぶり、首もとを鎖のような装飾品で縛っている。からだもまた白い装束で包んでおり、その風体は例えるなら雲掃人形という異国のまじない具のようだった。
瞬間、少年は激しい頭痛に襲われる。

――夜霧の樹海。
――黒い荷馬車。

――白い雲掃人形。
――緑衣のローブ。

少年の眼球がグルングルンと回っていた。
頭蓋の奥底から鼻血があふれ、彼の幼い顔がぬらぬらと汚れていく。彼は枝へとしなだれかかり、そのままバランスを崩して地面に落ちていた。それなりの高さはあったが、運よく下にはやわらかな草花が茂っており、たいした怪我にはならなかった。彼は起き上がり、首をまわして雲掃人形たちを探す。
彼らは、こちらに気づいていない。
少年はすぐに彼らのあとを追っていった。
されど、それは上手くいかなかった。立ち並ぶ樹木のあいだを通りぬけていくうちに、彼らの姿を見失ってしまったのだ。もともとそれほど近くにいたわけじゃない。加えて、少年の体調は最悪だった。先のフラッシュバックを起こしてから吐き気と震えがとまらなかった。足はふらつき、視界は眩み、気づけば、彼は樹の幹に手をつき息を荒げていた。
「くそっ……」
少年はあたりを見まわす。
彼は雲掃人形たちを見失ったばかりか、自分の居場所さえ分からなくなっていた。完全に迷

子というやつだ。オンボロバードの名前を呼んでみたが、返答はない。彼の声は森の中にむなしく吸いこまれていくだけだった。
その後、彼はどこを歩いたのか覚えていない。
森の中をさまよい歩き、ついには力つきてくずおれていた。
暗転していく視界の中に、妖しく光るマンダラ模様が浮かんでいた……。

※※※

ガタガタと体がゆすられ、少年はゆっくりと目をひらいた。
彼は狭い個室の中にいた。向かい側には褐色肌のきれいな女性と色白の男性が並んで座っている。女性の方はショールを肩にかけており、落ち着いたエキゾチックな美しさがあった。また、男性の方は線が細く、紳士然とした身なりから知的な印象が見受けられる。口もとに生えたちょびヒゲがどことなくコミカルだ。珍しい組み合わせに思えるが、その雰囲気からしておそらくふたりは夫婦だろう。
と、少年が目覚めたことに気づき、女性がにっこりと微笑む。
「目が覚めた？」
「ここは……どこですか？」

「安心して、ここは馬車の中よ」
そう言って、彼女は少年にはおらせていた毛布をかけなおした。
馬車と聞いて少年は瞬間的に身がまえたが、すぐに緊張の糸をといた。目の前の二人に悪意をまったく感じなかったからだ。馬車の内装もごく一般的なものに見えたし、なにより窓のそとが明るかったのが安心感につながっていた。
「君は気を失っていたんだよ。森の入り口で、木を背にした状態でね。それで、私たちが保護したんだ。私は町医者をやっていてね。君はうなされていたし、具合も悪そうだったから、私たちの馬車に運んだんだよ」
「そうでしたか。助かりました。ありがとうございます」
「あんなところで倒れるなんて、何があったの？」
「それはですね……えっと、つまり……」
眼球職人のおつかいをしていた途中で謎の雲掃人形たちを見かけて失神した。とは言えなかった。本当のことを言ったら、頭のおかしい子だと思われてしまう。そうなれば病院へ連れていかれるだろう。そして狂人として幽閉されてしまうかもしれない。記憶喪失と言っても同じことだ。こんな不穏な眼帯をした子どもを保護してくれるような善人ならば、まず間違いなく放ってはおかないだろう。
言葉をつまらせる少年に、女性が「？」と首をかしげる。

考えたあげく、少年は次のように説明した。
「実は、おばあちゃんにおつかいを頼まれていたんですが、途中で持病の眩暈をおこしてしまったようです。いつもはちゃんと薬を持ち歩いてるんですけど、今日はうっかり……」
「まぁ、それはたいへんだったわね。もう大丈夫なの？」
女性に訊かれ、彼は首をたてにふる。
すると、今度は色白の紳士が少年へと尋ねた。
「君はどこへ向かう途中だったんだい？　私たちはこれからこの先の町でちょっとした用事があるんだが、もし君がそのおつかいとやらで別の町に向かうのであれば、私たちの用事が終わり次第、君をそこまで送っていってあげようかと思うんだが……どうだろう？」
男性の問いかけに、少年はどう答えるべきかしばし悩む。
そしていざ答えようとしたそのとき、馬車の運転手が先に口をひらいた。
「旦那さま、着きました」

※※※

町はなんだか暗かった。
家々は多いが、装飾の類は少なく、その端々にどこか無力感のようなものが感じられる。風

に揺すられる看板はきしみ、ひび割れた煉瓦はふとしたはずみに崩れそうだった。寂れた町なみに、どことなく荒んだ雰囲気が混じっている。

少年はあのあと、紳士の申し出を断って馬車を降りた。

自分もこの町に用がある。帰りはひとりでも大丈夫だから。お世話になりました。と、述べる少年に対して、夫婦は善意から引きとめようとしたが、少年はなかば逃げるようにして馬車から降りた。心配してくれたのは嬉しかったが、自分のこの特殊な状況を考えると、あの優しさと一緒にいればすぐに行きづまるのは目に見えている。

「さて、どうしたものか……」

町を歩きながら、少年はつぶやく。

彼は通りを進みながら考えていたのだが、その途中でふと、自分へと向けられる強い視線に気がついた。まわりを見ると、すれちがう市民のほとんどが少年へと注目している。彼らはみな、訝しげな表情だった。こんな子どもが顔の四分の一を覆う恐ろしげな眼帯をして往来をぶらぶらしていたら、警戒されて当然である。大人はギョッとしていたし、小さい子どもは母親のうしろに隠れていた。

あまり目立つのもよくないか。

そう思い、少年は顔をかくしながらさっと路地へと身をすべりこませた。

路地を進んだ先には少し広めの空間があった。
どうやらここはゴミ捨て場らしい。あたりに嫌な悪臭が漂っている。敷地は四角形で、目の前には石づくりの階段があり、その階段の右側にフタのない大きなゴミ箱があった。また左側の地面には汚れた新聞紙がひいてあり、階段を補強する塀の上には酒ビンが転がっている。きっと浮浪者でも住みついているのだろう。人目を避けるには悪くない場所だ。四方の壁面が陽ざしをさえぎり、うす暗いのも都合がいい。
少年は路地裏の階段に腰をおろし、ひと息ついた。
オンボロバードの忠告をやぶった結果、このざまだった。
彼にあやまるためにもまずは瞽女の宿に帰らなければならない。しかし、その方法は見当もつかなかった。自分は崖から落ちて気を失い、そして気がついたらすでに宿の中で介抱されていたのだ。道順など分かるはずもない。オンボロバードはこようと思ってこられる場所ではないと言っていた。察するに、ただ森へ入っても宿にたどりつけるとは思えない。
なにか、デラさんたちと連絡をとれる方法はないだろうか。
目をつむり、少年は考え込む。
妙案は出てこなかった。
そんな折、ふいに表通りの方から物騒な音が聞こえてきた。
人の怒声と、ビンが割れる音……もめごとだろうか。少年は立ち上がる。本来ならばそのよ

うなことにかまけているべきではないのだが、あまりに今後のメドが立たなかったため、つい理性が好奇心に負けてしまったのだ。

トラブルは往来のど真ん中でおきていた。

表通りに出て露店をいくつかとおりすぎると、ひらけたところに十字路がある。そのかたすみに、不自然なかたちで人が集まっていた。少年は目立たぬように野次馬たちのあいだへと入りこみ、なかの様子をさぐる。

「だいたい、てめぇがぶつかってきたんだろ！」

怒声が響く。目にとびこんできたのはいかつい男だった。

身なりは汚らしく、肌もくすんでいて浅黒い。顔に浮きでた不快な赤色と、呂律のまわっていない口調から酔っぱらっていることは明らかだった。よく見れば、手にした酒ビンが割れており、そのガラスの破片が地面に散らばっている。

「あやまりやがれってんだ！　このガキ！」

男がまた怒鳴る。

怒りの矛先を見ると、そこにはひとりの少女が立っていた。

背丈は少年と同じくらいで、服装は白のブラウスにうす茶色のボディスベスト、下はベージュの長いフレアスカートをはいていた。はねた栗色のクセッ毛が特徴的で、赤いカチューシャ

をしているため頭のてっぺん近くはそれほど目立たないが、そのぶん、顔のよこにあたる部分が少しふくらんで見えた。ぼさぼさとした毛束感はどこか野生動物の毛なみを連想させ、彼女のたたずまいと合わせると、まるで小さな狼のように見える。

そんな彼女はあびせかけられる罵倒にもめげず、男をキッとにらみかえしていた。口をとざし、助けも呼ばず、悲鳴のひとつさえ声に出していない。その強気な姿勢がまた男の怒りに火をくべてしまい、罵声の言葉はより汚くなっていった。

男が少女につめよっていく。

不思議なことに、まわりの人は誰も彼女を助けようとはしなかった。

民衆の表情はさまざまで、冷たい目で見ている者、あわれむように見ている者、また、どうしようかと逡巡している者などさまざまだったが、結局、誰ひとりとしてその諍いをとめに入ることはなかった。

「なんとか言いやがれってんだ、この――」

そうこうしているうちに、男がついにその手を少女の胸もとへとのばす。

瞬間、少年は野次馬のかべからとびだしていた。

「大のおとなが女の子にそう熱くならずともいいじゃないですか」

「あぁ？　なんだぼうず、妙なもんつけやがって」

男が据わった目で睨みつける。

少年はなおも男をなだめようと頑張ったが、何を言っても無駄だった。少年の諭そうとする口調がかえって癇に障るらしい。男はしゃしゃり出てきた少年の胸ぐらをつかみ、そのままかるがると持ち上げてしまう。

「正義のヒーロー気どりか？　いけ好かねえ」

男の顔がまぢかに迫る。吹きかけられる息はとてつもなく酒くさかった。

少年は男の手をふりほどこうと抵抗したが、まったく効果は得られなかった。少年をしめあげる剛腕はビクともしない。そして何の好機も見い出せぬまま、男がいよいよ少年をぶん殴ろうと拳をかため、右腕をうしへと引いてゆく。

そして次の瞬間、男の剛腕が少年の顔に飛んできた。

だがしかし、男の拳は少年の顔にあたる直前で軌道を変え、彼のほほをかすめるだけに終わっていた。男はそのまま力がぬけたようにその場へと崩れおち、うずくまる。一方、少年は宙に放りだされ、地面へと尻をしたたかに打ちつけていた。痛みに苦鳴をもらす彼だったが、男の方は声さえ出せないほどやばいらしい。

見ると、うずくまっている男のうしろに少女が立っていた。

どうやら、彼女がうしろから男の大事なところを蹴りあげたようだ。

「た、たすけてくれてありが――」

言い終わらぬうちに、少女が少年の腕をとる。彼女は少年を引っぱったまま勢いよく駆けだ

すと、ざわめく人だかりを押しのけてその場をあとにした。

※※※

頭上から、荷馬車の走る音が響いてくる。

ふたりはいま、石橋の支柱の下に並んで座っていた。

先のひと悶着のあと、少年は少女に先導されるままいろいろなところを走りまわった。そして最終的に行きついたのがここだった。あれから一時間は経っているので、あの酔っぱらいはもうあきらめたことだろう。しかし念には念を入れて、ふたりはまだこうして石橋の下で身をかくしていた。

「さっきはたすけてくれてありがとう」

「……」

少女は無言だった。

彼女はまるで品定めでもするかのように、少年の顔をじっと見つめていた。

その力強い瞳に、少年はたじろいでしまう。やっぱり、この殺伐とした眼帯が怪しまれているのだろうか。だが、けっしてあやしい者ではない。それをどうやって彼女に説明しようかとオロオロしていると、それを見た少女がクスクスと笑いだした。

ころころと変わる少女の表情に、少年はまた混乱する。
と、少女が急に少年の手をとった。
瞬間、少年はドキッとした。
あらためてよく見ると、少女は可愛かった。ぼさぼさだが不潔感を覚えさせないほどよい長さの髪に、鈴を張ったような丸くて大きな目。着ている服は庶民的なものだったが、むしろその質素さが彼女の愛らしさに拍車をかけていた。少しかげりを帯びているような雰囲気はあったが、その奥に、先のやりとりで見せたような芯の強さも感じられる。
「な、なに？」
「……」
少年が顔を赤くそめてドギマギしていると、少女が黙々とひとさし指を少年の手のひらに這わせはじめる。最初、少年にはそれの意味するところが分からなかった。しかし、彼女がたびたび少年の目をのぞきこみ、なにかを懸命に伝えようとしているのを見て、彼はようやくひらめいたのだった。そう、彼女は文字をかいているのだ。
【声が出せないんだ。ごめんね】
「そうだったんだ。気がつかなくてごめんよ」
【さっきはかばってくれてありがとう。わたし、クーイ】
少女は微笑むと、続けざまに文字をかいた。

【あなたはだれ？　どこからきたの？】
「それなんだけど、実はその……話せば長くてね――」
気づけば、少年はこれまでのはなしをすべて少女に語っていた。
自分が記憶喪失であること。眼球職人と名のる怪人物に助けられたこと。そしておつかいの途中で森から出てしまい、流れ流れて現在にいたっていること。彼がこんなに正直にはなしたのは、少女が自分と同じぐらいの子どもだったからだろう。彼は彼女に謎の緊張をいだく一方で、たしかな安心感も覚えていた。
が、少年の話に、少女はジトっとした目を向ける。
当然の反応だった。こんな荒唐無稽な話を誰が信じるというのか。
しかし、彼女にはどうしても信じてもらいたかった。少年は必死にとりつくろう。身ぶり手ぶりを加え、眼帯の実演もしてみせる。そして少女にも試してもらおうと眼帯に手をかけたところで、少女の手が少年の手にふれる。彼女はやさしく微笑むと、少年の手のひらにまた言葉をつづっていった。
【信じるよ。君はいいひと】
「ありがとう……ところで、さっきのさわぎは？」
少女が信じてくれたことにホッとしたのもつかのま、少年はさきの一件について彼女に尋ねていた。こう面と向かって女の子にいいひとだなんて言われると、なんだか胸がドキドキして

どうにも変な感じになってしまう。それをごまかすために彼は話題をきりかえたのだ。しかしそれがまずかったのか、少女はふと瞳を暗くし、うつむいてしまう。

【いつものことだから……】

「いつものことって……あれが？」

少年は驚くのと同時に憤慨していた。あんなことが日常に起こっていたらたまったもんじゃない。何が原因で起こったのかは知らないが、大人が口のきけぬ少女に対してあんなに口汚く罵り、あまつさえ暴力をふるおうとするなどあっていいはずがない。思いだすと、また怒りがわいてくる。男に対してもだが、まわりで見ていた人が誰ひとり助けにいこうとしなかったことにも納得がいかなかった。

【わたし、みんなから嫌われてるから、しょうがないんだ】

「しょうがないって、なんでさ？」

【……】

少女の指がとまる。

重たい雰囲気に天気も根をあげたのか、にわかに雨が降りだしていた。ふたりは橋の下にいるため濡れはしなかったが、空気はどんどん冷えていく。それは彼女の憂いを帯びた瞳と相まって、少年の心を騒ぎ立てていた。これは踏みこんではいけない領域だったか。と、少年はあわてて少女に謝る。

「ごめん。話しにくいことならいいんだ。聞かなかったことにしてよ。ただ、君のことはまだよく知らないけど、君が嫌われるのはまちがってると思うんだ。あの酔っぱらいに殴られそうになったとき、君は助けてくれただろ？　あれはすごい蹴りだった。見てはいないけど、気迫で分かるよ。いや、そんなことを言いたいんじゃなくてさ、つまり――」

少年の狼狽ぐあいに、少女はまたクスクスと顔をほころばせる。

そして少年の手をとり、ゆっくりと指を走らせていった。

【わたし――】

「見つけたぞ！　クソガキども！」

聞きおぼえのある野太い声に、ふたりはハッとして顔をあげる。

見ると、目の前にさっきの酔っぱらいが息を切らせて立っていた。逃げてからすでに一時間以上は経っているというのに、彼はまだふたりのことを探していたらしい。なんて執念ぶかい男だろうか。

「もう、逃がさねえからな……」

少年は少女の手をとり、その身をひきよせた。

酔っ払いがじりじりと近づいてくる。反対側には子分らしきチンピラが数名おり、ふたりの逃げ道を阻んでいた。前と後をおさえられ、残るルートは右と左だが、右はあいにく石橋の支柱で壁になっており、左は川だった。川にとびこめば運よく逃げられるかもしれないが、雨の

せいで水はにごり、水かさも増えていた。下手をすると溺れ死ぬかもしれない。少年だけならまだしも、少女もいるからそんな危険な行為はできなかった。
万事休すとはこのことだ。
そうこうしてるあいだに、酔っぱらいがまぢかにまでせまってくる。
少年は少女をかばって盾になろうとしたが、酔っぱらいの剛腕がふるった薙ぎはらいによってかんたんにふっとばされてしまう。彼のからだは地面へとつっぷし、痛々しく雨でゆるんだ土にまみれた。
少女が呻く少年にかけよろうと走りだす。
が、その小さな肩を、酔っぱらいの手がつかむ。
抵抗する少女に向かって、男はしゃがれた声を荒げた。
「親を売った金で生きてて楽しいか？」
その言葉に、少女の顔がゆがむ。
「……やめろ……この、ごろつきが……」
少年は倒れたまま酔っぱらいの足にしがみつき、血の滲んだくちびるをふるわせる。けれども、それはあまりに非力な抵抗だった。彼は男の蹴りにより、またもふり払われてしまう。
「みんなてめぇにムカついてんだ！　覚悟しな！」
酔っぱらいが拳をふりあげる。

瞬間、雨雲を突き刺すような雄々しい嘶(いなな)き声が響きわたった。
見れば、石橋の上に豪華な馬車が一台、停車していた。そしてその馬車の窓から、ひとりの男が顔を出している。彼は橋の下をなめるように見下ろし、告げた。
「これはいったいなんの騒ぎかな？」
その男は見るからに上流階級の者だった。
年齢は三十歳前後だろうか。顔だちは凛々しく、ほどよいタレ目がミステリアスな色気を放っている。また、潤いを帯びた長い黒髪がひどく快楽的な印象を漂わせていた。彼の出で立ちは勇ましく、スマートな長身を包むゴシックコートや頭にかぶったホンブルグハット、そして首もとに巻いたクラバットなどなど、どこもかしこもその意匠は貴族趣味一色だった。
「なんにせよ、これ以上の暴挙はやめておきたまえ」
男がそう言ってひとにらみすると、酔っぱらいとその子分たちは青い顔になってすぐさま退散していった。その一幕から見ても、この男がこの町において相当な地位を有していることがうかがえる。
【……ごめんね、わたしのせいで……】
「君のせいじゃないさ。それにしても、もっと鍛えておくべきだったよ」
少女に抱き起こされながら、少年はてれ笑いを浮かべる。その胸中は恥ずかしい思いでいっぱいだった。自分はなんて弱いのだろう。この男がとめてくれなかったら、少女は確実にひど

い目にあっていただろう。少女の服がずぶぬれなのを見て、少年は笑顔の裏でしずかに奥歯を軋ませていた。

と、そんなふたりを見て男は言った。

「ふたりともドロだらけじゃないか。このままでは風邪をひいてしまう。風邪は想像以上にこわい病気だ。なめてかかると肺炎になってしまう。そこでどうだろう。実は、石橋の下よりもずっといい雨やどりに適した場所があるんだがね」

第二章、幻視旅行

ふたりは口をひらいたまま天井をあおぎ見ていた。
そこには見たこともないきらびやかなシャンデリアが吊るされてあった。このまま見ていたら目がつぶれてしまいそうな気がして、少年は首をもとにもどす。が、まわりにはまた奇妙奇天烈なオブジェやら何やらが置かれており、目のやすまる場所はなさそうだった。
【すごい部屋だね】
「あぁ、まるで博物館の一室だよ」
少年はそう言って、感嘆の吐息をもらす。
右手の壁には天使と悪魔が戦っている大きな絵画が飾られていた。そして左手の壁にはいくつもの奇怪な仮面が飾られており、突然の来客へと熱い視線を注いでいる。異国の民族が使う祭具か何かだろうか。白髭を生やした老翁の面や角を生やした獣の面など、その種類は多岐にわたっており、どれもが魔術めいた霊性を感じさせていた。
「私は世界中の珍品を蒐集していてね。ここにはその一部を展示してるんだ」
テーブルの向こうで、男が紅茶をひとくちすする。
彼の名前はギプスウェル。フルネームは、ギプスウェル・ラ・デュノール・ド・ヴォドレイ

ンだ。そしてまたの名を怪事卿（かいじきょう）だという。もちろん、怪事卿というのは周囲が彼を揶揄する目的で用いた言葉なのだが、彼はそれをえらく気に入っており、自分でも名のるときにつかっているのだそうだ。

聞けば、彼は一年ほど前にこの町の新たな領主としてやってきたばかりらしい。

なんでも、前の領主が湖で溺死したとかで、そのあとがまとなったのだそうだ。この館も前の領主のものだったが、彼が買いとってじぶん好みの内装に変えてしまったのだという。前の領主は金に汚いかなりの悪徳領主だったそうで、そのセンスもまた悪趣味きわまりない下品なものだったらしい。

「ささ、君たちも飲みなさい。遠慮はいらないよ」

「すいません、いただきます」

怪事卿にうながされ、少年らはティーカップに口をつけた。

三時間前、豪奢な馬車によってふたりが運ばれた先、それは怪事卿の館だった。

そしてここはその館が有する多くの部屋のうちの一室で、怪事卿の執務室でもある。

ふたりは館についてからまずシャワーを浴びさせてもらった。貴族の家だけあってサービスは迅速で、お風呂から上がるとふたりが着ていたドロだらけの服はすでに洗濯にまわされていた。いまは服が乾くのを待っているところだった。ちなみに、ふたりがいま着ている服も館で用意してもらったものである。来客用のものだが、自分たちの着ていた服よりもずっと上等な

代物だった。
「あの、ギプスウェルさん。さっきは助けていただいてありがとうございました。それに、シャワーや服までかしていただいて……」
少年がそう言って頭をさげる。少女もまたそれにならった。
「気にすることはない。来客をもてなすのは貴族の趣味みたいなものだよ。それに、私はここの領主だ。もめごとは見過ごせない。それも、あんな野蛮なやりかたはね。とはいえ、君も君だ、お嬢さん。強い女性は美しいが、儚いものだ。あまり無茶はしない方がいい」
そう言って、怪事卿はちらりと少女に目を向ける。
と、少女は困ったような仕草を見せた。
「すいません、彼女は、クーイは声が……その……」
「あぁ、これは失敬。私としたことがうかつだった。ゆるしてくれ」
怪事卿が深々と頭を下げる。
貴族が平民に対して謝罪するなど驚きのことだった。
彼は一見すると色事師や放蕩者のようにも見えたが、存外まともな人物のようだ。
それから、三人は服が乾くまで雑談を楽しんだ。なかでも、怪事卿のコレクションの話はひときわ少年の興味をくすぐった。やれ海底の古代都市から発見された邪神の像だとか、やれ未知の言語で記された謎の手稿だとか、果ては砂漠で発掘された巨人の頭蓋骨などなど、それは

もう怪しげな蒐集品の数々が次々に紹介されていった。眉唾なものも多々あったが、その膨大さと貴重性から、彼の所有する財力の高さとオカルティズムへの傾倒ぶりがうかがえる。
そんな中、怪事卿がふと少年に尋ねる。
「ところで、君は見かけない顔だね。この町の子かね？　それに、なんとも面白いものをつけているじゃないか。舞踏会用の仮面のようにも見えるが、反面だけとは珍しい。しかし盲人用の眼帯にしてはデザインが禍々しいね。まぁ、わたし好みではあるが」
「それなんですが、実は僕、記憶喪失でして……」
少年はすべてを正直に打ち明けた。
というのも、彼ほどのオカルト愛好家であれば、眼球職人の家に泊まったという信じがたい話も受け入れてくれるかもしれないと思ったのだ。そしてあわよくば、瞽女の宿への帰り方が分かれば……と。
「眼球職人？　眼球職人とはこの世界を創造した五大魔術師の一人のことかね？」
「そうらしいですね。彼女は自分のことをデラと名のっていましたが……」
少年の返答に、怪事卿はしばし沈黙した。
が、彼はすぐに少年へと向きなおり、続けて言う。
「私も人を見る目はある方だ。君が嘘をついているようには見えない。とはいえ、これほどの話となると、証拠というほどでなくてもいいから、なにか信じるためのひと押しがほしいとこ

ろでね……」
少年はうなづく。彼の言うことはもっともだった。
「そこでなんだが、さきほど君が言っていた眼球職人からおかりしたというその眼帯、それを私にちょっと試させてもらえないかね？　それが説明のとおりの代物であれば、君のはなしに絶大な信憑性が出るだろう？」
怪事卿の申し出に、少年は躊躇した。
デラさんから借りたものを、デラさんの許可なしで他人に使用させるのはなんだかよくないような気がしたからだ。それに、自分は使用できたが、自分以外の人が使って効果が出るのかまでは分からない。理解を超えた魔術具であるため、効果が出ないどころか、からだに異常でも起こされたら困ってしまう。されど、これしか自分の話に信憑性をもたせる方法はない。
少年は悩んだすえに眼帯をとり外し、怪事卿に言った。
「右目を閉じててくださいね。でないと、意味がありませんから」
「……信じられん……」
眼帯を手にし、怪事卿はつぶやく。
いましがた、少年の話は証明された。怪事卿の閉じられた瞳に、眼帯は分けへだてなく視覚をもたらしたのだ。これにはさすがの彼も驚きをかくせないようだった。彼はわなわなとから

だを震わせ、ノドを鳴らしている
「いざ体感すると、言葉にならんものだな」
そう言いながら、怪事卿は少年に眼帯を返却した。
「しかし少年。私から言っておいてなんだが、その眼帯をあまり他人にかさない方がいい。それは君が思っている以上にたいへん貴重な一品だよ。心ない者であれば、君を殺して奪いとっていくことさえいとわないだろう」
「たしかにそうですね。今後は気をつけます」
指摘され、少年はハッとしていた。
そんな彼を見て、怪事卿が大きく笑う。
「君は君自身に起こっていることの凄さがまだ分っていないようだね。いや、実感しろという方が無理な話か。なにせ、創世神話に登場する魔女と知り合いになったのだ。これは類まれなる奇縁だよ。そしてそんな彼と知り合えた君もだ。お嬢さん」
いきなりの指名に、少女が目をパチクリさせる。
怪事卿は立ち上がり、力強く続けた。
「世に詠われる創世記は数あれど、その中でも特に奇怪な逸話がひとつ。我々が住まうこの世界は、五人の魔術師によって造られた。眼球職人、耳職人、鼻職人、舌職人、そして皮膚職人と呼ばれる彼ら造物主は長い歴史のはざまに現れては、我らに知恵を授けていったという。な

かでも、眼球職人は文献に残ることも多い。一説によれば、彼女は昔、自らの力をいくつもの魔眼にかえて世にばらまいたらしい。その魔眼を手に入れた者は神のごとき異能を授かり、ある者は大国さえ滅ぼしたとか……」

少年は怪事卿の演説に圧倒されていた。

ようやく、自分の置かれた立場の異常さを実感する。

「少年よ、君は千冊の歴史書にも載っていない神の名前を暴いたのだ」

「暴いただなんて、普通に自己紹介されましたし……」

「ならばこそ、また一驚！」

怪事卿が声を高らかに張りあげる。と、その声の大きさで自分の興奮ぐあいに気がついたのか、彼はせきばらいをひとつはさむと、穏やかな声で続けた。

「これは失敬。だが、君は知るべきなのだ」

「知るって、何をです？」

「神の御業さ」

彼は立ち上がると、部屋に飾られていた謎のオブジェの穴に手を差しこんだ。そして何かごそごそとしたようすを見せる。すると、部屋のどこかで、まるで大きな錠が外れるかのような機械音が響いた。まさかと思いつつ怪事卿の動きを目で追うと、彼は部屋の奥に位置する本棚の前へと移動していく。

「ふたりとも、こちらへ来たまえ」
そう言うと、彼は一冊の本を手でゆっくりと押した。とたん、本棚が鈍い摩擦音を立てながら横へとスライドしていく。隠し戸の奥に出現したのは小部屋とも呼べぬせまい秘密の空間だった。視線を落とすと、そこには地下へと続く石の階段が伸びている。
その先には深い闇がたまっていた。
怪事卿が言う。
「服はもう乾いたころだろう。いま、もってこさせるとしよう」

※※※

暗がりの中で、石段を靴底で打つかわいた音が反響していた。
充満する空気が重い。一歩踏みだすたびに、天地と左右が逆転してしまいそうになる。ふたりは自然と手をにぎりあっていた。怪事卿の持ったランタンが唯一の灯だった。しかしその灯りさえ、この濃厚な闇の中では心許ない小光の揺らぎにすぎない。足もとの影が壁を走っていくさまはひどく不気味だった。
怪事卿を先頭にして、少年と少女は慎重に進んでいく。
やがて階段が終わり、目の前には石柱が並び立つ地下通路が広がった。

あいかわらず視界は悪かったが、壁のくぼみに置かれた蝋燭の火があったため、先ほどよりはいくぶんかマシだった。少年は安堵からか、ふと、その遺跡めいた石柱のひとつに手を伸ばしてみる。手のひらから伝わるその質感は恐ろしく冷ややかだった。得体の知れない霊的感覚に、少年の足は竦んでしまう。が、そのあいだにも、怪事卿はどんどん先へと進んでいく。少年は鈍る足に活を入れて彼の背中を追っていった。

しばらくすると、近くから水の流れる音が聞こえてきた。

目を凝らすと、両脇が小さな水路になっているのが分かる。また、周囲の石壁の随所には穴があけられており、そこからも水が流れ出していた。ときおり、壁や影が不自然に動いているように感じるのは、おそらくこの水流と蝋燭の火によるまやかしだろう。そう自分に言い聞かせて、少年は歩き続ける。

それからほどなくして、怪事卿の足はとまった。

目の前には古びた大きな扉がある。彼はそれをグッと押しひらいた――。

瞬間、少年の視界に巨大な空間がとびこんでくる。

そこはまるで千年の時の果てに朽ちてしまった廃聖堂のような場所だった。視界はいまだ仄暗いままだったが、目にうつるすべてが絶対的な存在感を以て脳内に入り込んでくる。左右に列する古めかしい柱の群れ、ひび割れた石畳、倒壊しそうな老壁……天井に張りめぐらされた巨大な蜘蛛の巣でさえ、あらかじめ設えた装飾品のように思えてくる。

めまぐるしいほど瑰麗で、退廃的な場所だった。
「……すごい、ここはいったい……」
少年の足はいまや無意識に動きだし、圧しかかる畏怖の念によってその動きを惑わされていた。室内にほどこされた美麗な装飾に目を奪われ、心臓をつらぬくゾッとするほど魔的な印象に、呼吸さえもが忘却の彼方だった。彼は少女と一緒にゆらゆらと、大海に漂う木の葉のようにゆっくりと進んでいく。
「――言うなれば、古来より語り継がれる禁断の一ページ」
怪事卿の言葉を背中で聞きながら、ふたりは一歩、また一歩と足を運んでいった。
壁面を走る厳かな文様を目で追いながら、吸い込まれるように、その先へ。
「ここには、我々の原点が眠っている」
「……ぼくたちの……原点……」
少年はつぶやき、小さな階段に足をかけた。
登った先で彼らを待ち受けていたのは大きなガラスの棺だった。部屋の最奥に位置するこの場所はどうやら祭壇のようだ。しかし奥まっているせいもあり、光がとどかず視界が輪をかけて悪かった。少年はガラスの棺の中を見ようと顔を近づけ、両目を凝らしたが、何もないような、何かあるような、そんなあやふやなことしか判らない。そこで、彼はガラスに両手をくっつけて、さらに顔を近づけていく。

その刹那、祭壇のまわりに設置された色とりどりの篝火(かがりび)が轟々と燃え盛った。

——青銅(ブロンズ)色。
——黄玉(トパーズ)色。
——紫水晶(アメシスト)色。
——緑玉(エメラルド)色。
——真鍮(ブラス)色。

ハッとして息を吸い込む少年。

彼の両目が、大きく見ひらかれる。ガラスの棺は五色の奇怪な炎に照らされ、内部に秘めた禁忌(タブー)をさらけだしていた。ガラスに吸いついた少年の小さな両手、その両手をガラス越しに吸いつきかえす、何者かの手があった。否、それは手と呼ぶにはあまりに不出来。爪もなければ指の形跡すら見当たらない。

まるでそう、ただの粘土のようで……。

と、思うがはやいか、少年は悲鳴をあげる。

ガラスの向こう側から何者かが少年の顔を覗き込んでいたのだ。その顔もまた粘土細工のような代物で、そこにあるべき目や鼻などのパーツがどこにも存在していない。ただ、茶色い物

体がかろうじて顔形をかたちづくり、くりかえされる緩慢とした蠕動がその表面に歪な凹凸を走らせているだけだった。
「土塊の民……我々はそう呼んでいる」
少年と少女は眼前の怪異に思わず腰を抜かしていた。
見上げた視界にうつるのは、ガラスに閉じこめられた蠢く奇妙な土人形。そしてそれをとりかこむように周囲へと設置された、五体の異様な石像だった。その造形は語るに忍びなく、形容に言葉をつまらせるほど面妖な形状を呈している。
強烈な怪炎の灯りに揺らぐその光景に、少年は身ぶるいを禁じ得ない。
「――遥か昔、神の光がこの世を貫いた――」
少年の両目は土偶と異形魔像に釘づけだったが、同時にその両耳はうしろから発せられる男のひとり語りを不思議なほどすらすらと捉えていた。視界と聴界から織りなされる無数の刺激が脳みそを揺さぶりおこし、彼らの中に存在し得ない、ある超然的な閃きをその脈打つ眼球に投影していく。
それは、途方もない幻視旅行だった。
枯れた大地と畸形の樹木。
とある荒廃した世界に、不出来な土塊がいくつも蠢いていた。

それはいくら月日を重ねようと、退化もしなければ、進化もしなかった。命がないから死ぬこともなく、意思がないから交わることもない。それらは、言わば永遠の悲哀だった。

しかしあるとき、転機が訪れる。

五つの異形が天を砕き、この俗界へと降り立ったのだ。

彼らは蠢く土塊たちに力を授けていった。眼球を埋めこみ、耳を生やし、鼻をつけ、皮膚をはり、口をあけて舌を植えこんだ。土塊は神々の手によって瞬く間に捏ね上げられてゆき、そしていつしか、彼らは自律する肉塊となって地を歩いていた。

それが――命の起源。

彼らはそれから進化の系譜を次々と描いていった。

眼球は脳を産み、耳は三半規管を産んだ。鼻は肺を呼びおこし、舌は歯列と胃袋を目覚めさせ、皮膚は血をつくり、肉と骨でからだを強化した。変異はさらなる変異を引きつれて、この地に住まう生物を多種多様なものへとかたちづくっていった。見れば、大地の上では動物が走っていた。また、森の中では亜人が栄えていた。そして秘境においては、恐ろしい怪物たちが産声を上げていた。されど、そのなかでもまた神に愛された特殊な種族があった。彼らは長き交わりの果てに大繁栄を築き上げ、いつしか、人と呼ばれるようになっていた……。

それが――種の起源。

瞬間、幻視旅行は終わりを告げた。
少年の眼球は廃聖堂に帰還し、通常運行を再開する。
ふたりは愕然としてくずおれていた。体温が上昇し、血管が激しく脈打っている。眼球が燃えるように熱かった。舌がしびれ、鼻がつまり、耳鳴りが耳道を行ったりきたりしている。時空を超えた驚異の体験はすさまじく、全身の細胞がその余波を浴びていた。
「今のが、僕たちのルーツ……」
眩暈をおこしながら、少年は無意識のうちにつぶやく。
なんという絶対的な存在だろう。形容しがたき異形の者たち。異次元からの来訪者。彼らを表現すればすれほど、その肩書きは陳腐に響いてしまう。畏怖の念と畏敬の念が同居するいまだかつてない感情を胸に、少年はそれぞれの石像を何度も見返していた。そして、おのずと帰結する視線の先……少年は真正面に置かれたガラスの棺を見た。
いる。やはりそこにいる。
蠢く、土色の物体が。
「彼は、職人による進化の刻を不運にも逃してしまった哀れな一体だ」
少年は呻いた。信じられなかった。
この生きてもおらず、死んでもいない、不快で悲しい物体が自分のもとの姿なのだ。少年も遥かな時間の中を逆行すれば、あの朽ち果てた大地で彼と一緒に蠢いていたのだ。自分は神の

威光を浴び、彼は浴びれなかった。ただそれだけの差でしかない。
愕然とする少年に、怪事卿は続ける。
「我々は傲慢だった。神に愛されたがゆえに、盲目となっていた。我々のルーツがこのような醜い存在だったなど、ときの権力者たちがどうして黙っていられようか。この受け入れがたき史実を消すため、大規模な宗教戦争が起こった。弾圧と迫害の日々。徹底的な口封じが世界中で行われ、いつしか、土塊の民という歴史の一ページは闇へと葬られた。だがしかし、破られたその一ページは異端者たちの手により、ひかりの届かぬ地下世界で今日まで守られ続けてきたのだ。彼らはこの封殺されし暗黒時代を神からの試練とし、いつの日か、神の国へと赴くことを胸に誓った。そう、彼らの名は――」
ダンテクラヴィス原書協会。
怪事卿の演説に、少年はごくりとノドを鳴らす。
と、そのとき、となりにいた少女にある異変が起こった。
彼女が突然、ふらふらとよろけだしたのだ。そしてそのまま、ひっくり返るように倒れてしまう。少年は声をかけたが、反応はなかった。なおも肩をゆさぶろうとする少年に対し、怪事卿が諭すように言う。
「心配することはない。薬が効いてきただけさ」
「ギプスウェルさん、いったい、どういう意味ですか……」

少年は戸惑った。が、すぐにハッとしてその背筋を凍らせる。
怪事卿はそんな彼に申しわけなさそうにしながら、少女を抱えあげた。
「すまない、少年よ。だが我々には、儀式には彼女がどうしても必要なんだ」
瞬間、入り口の方から冷風がとんでくる。
見ると、廃聖堂の扉が大きくひらかれており、そこに、緑衣のローブをまとった小柄な人物が立っていた。そしてその左右には、見覚えのある白い雲掃人形たちが錫杖を手にして静かに並んでいる。不審者の表情はフードの影に隠れていたため読みとることは不可能だったが、その佇まいから発せられる不気味な圧迫感によって、少年は自分が異常なまでに注目されていることを悟っていた。
「ヘイロン司教、唖(おし)の少女はこのとおり」
緊張の糸が張りめぐらされていくなか、怪事卿がおもむろに口をひらいた。彼は抱きあげた少女を少し高くして、緑衣の怪人物へと見せている。
「……」
怪人物はなおも無言だった。
が、次の瞬間、そいつはまるで床の上を滑るように動き出した。
その速度はけっして速いものではなかったが、上下にぶれない奇妙な動きのせいで見る者の距離感が狂うのか、気づいたときにはもう眼前にまで迫っていた。怪人が緑衣のローブをねじ

り、少年の顔をじぃっと覗き込んでくる。
フードの中に潜むその瞳は人間のものではなかった。
それは、虹色にかがやく不気味なふたつのマンダラ模様。
グルグルと回転灯のようにまわり、幻惑的な怪光を放つ異次元の双眼だった。
少年が悲鳴をあげる。脳みそが煮えたぎっていた。激しい痛みと嘔吐感に苛まれ、彼はその場に膝をつく。頭蓋の奥底から、封印されていた忌わしき記憶があふれだしてくる……。

――汽笛の音。
――暗いトンネル。
――埋められた女性。

脳内の映像はまるで擦りきれたフィルムのようにボロボロだった。
だがしかし、少年にとっては現実以上にリアルなものだ。記憶の濁流は少年の両目を焼きこがし、彼のノドをギリギリとしめあげていく。たまらず、彼は両手の爪を頭蓋にくいこませていく。見たくない。思い出したくない。自分の過去が、自分の罪が、襲ってくる。されど、脳内の映写機は少年の意思とは関係なしにフィルムを回し続けていく。

――汚い孤児院。
――銀貨の鈍光。
――布に包まれた、何か……。

少年は絶叫した。
彼はすべてを思い出していた。自分があの晩、何を見て、何をして、そしてどうして崖から転落したのか……彼はしばらく四つん這いのままだった。両手を頭蓋にあてたまま、息をあらげて、動かない。否、動けない。
「大丈夫かね？　どこか具合でも――」
そう言って、怪事卿が少年の肩に手をかける。
少年はそれをはねのけ駆け出した。
彼はそのまま扉をぬけて、薄暗い地下通路へと身を投げる。

走れども、走れども、出口は見えない。
いや、そもそも出口など目指してはいなかった。少年が走っているのは、ただ恐怖をまぎらわせたいがためだった。じっとしていたら、いやでも頭のなかに現れる。罪悪感という名の魔物が、恐ろしい形相で睨みつけてくる。

地下通路はどこまでも続いていた。少年にとってそれはありがたかった。暗闇のなかで時の輪郭を忘れ、このまま出口が見つからぬまま全身が白骨化してしまえばいい。いまの彼はそんな幻想さえ抱いていた。しかしそんなことがあるはずもなく、やがて彼の目の前に石の壁が立ちはだかる。

少年は壁に両手をつき、つぶやいた。

「……セロ、ごめんよ……」

しぼり出した言葉が静けさのなかに溶けていく。

と、背後の暗がりから、雲掃人形たちの姿がぼうっと浮かびあがった。

オレンジ色のランタンが、彼らのシルエットをとかく不気味なものにする。彼らは頭をすっぽりと頭巾で覆っているため、その表情をくみとることはできない。が、それが彼らのうす気味悪さにより拍車をかけていた。彼らの顔面に施された奇怪な円形模様が、じりじりと少年へと迫ってくる。無言を保ちながら、彼らの白い手が、近づいてくる。

少年は目をとじた。

今後どうなろうと、それは自分に対する罰なのだと思っていた。

暗闇のなかで、彼らの持つ錫杖がシャリン、シャリンと鳴っている。

しかしいつまでたっても、少年のからだに彼らの手がふれることはなかった。

どうしたのだろう。そう思い、少年はちらりと目をあけてみる。

すると、彼らのようすがどうにもおかしかった。雲掃人形たちが何かに驚いたようにあとずさっているのだ。この突然の異変に、少年は頭上に疑問符を踊らせていたが、すぐにハッとしてうしろをふりかえった。

そこにいたのは、漆黒のマントをはためかせたひとりの美しい女だった。

彼女は庇の広いキャペリンハットから世にも稀なる紫水晶色の電髪をなびかせて、悠然とそこに佇んでいる。差しむけられたランタンの灯が彼女の陰影をことさらに際立たせ、その超常的な存在感をさらに眩惑的なものにしていた。

「デラさん！　どうしてここに⁉」

「心配したよ。まさかこんな地下にいるとはね」

「これにはいろいろ……って、今はそれどころじゃ……」

少年があわてて雲掃人形たちに視線をもどす。

彼らは何もない空間から現れた妖女にしばらく戸惑っていたが、やがて意を決したように彼女へと襲いかかっていった。とはいえ、相手は創世神話の大魔術師である。勝負になるはずもない。彼らが触れようとした瞬間、デラは忽然と姿を闇にくらませ、次いで混乱する彼らのうしろに現れるのだった。

「ちょっと眠っていてくれたまえ」

言うや否や、彼女は手にした銀飾のスプーンを指先ではじいた。

キィン――と、クリスタルのように澄んだ金属音があたりに広がっていく。
その瞬間、彼女をとり囲もうとしていた雲掃人形たちがみないっせいによろめきあい、その場に次々とくずおれていった。彼らは苦鳴をもらしながらのたうちまわっていたが、ついには力つきて失神し、そのからだをピクピクと痙攣させるのだった。
「彼らに何を？」
「なに、ちょっと目にものを見せてあげただけだよ」
そう言って、彼女は艶やかに微笑する。
「えっと、それはどういう……」
少年はその妙な言いまわしに首をひねったが、彼らのめくれあがった袖の部分にとんでもないものを見つけ、彼女が言わんとしていることの片鱗を理解した。力なく投げ出されたその腕には、なんと眼球がいくつも出現していたのだ。そして奇怪なことに、その目玉たちはいまなおギョロギョロと動いており、少年と目が合うとウインクまでしてみせる。
「君たちが処理できる視覚の情報量には限度があるのさ」
「視覚の……情報量ですか？」
デラの説明によれば、過剰な視覚情報が彼らを昏倒させてしまったということらしい。つまり、雲掃人形たちのからだに発生した目玉が宿主の脳にさまざまな視界を送りつけたのだ。しかし、人間の脳が処理できる情報量には限界があるため、過剰に供給された視覚情報を脳が処

理しきれず、その結果、彼らはオーバーヒートしたというわけだ。
「君たちの脳は繊細なのさ」
「なるほど……」
そう言って、少年は押し黙る。彼は次の言葉を探していたが、それはなかなか見つからなかった。ふたりのあいだに、もどかしい気まずさが募っていく。と、少年はついにたえきれなくなり、感情のままに彼女の名を呼んでいた。
「……あの、デラさん……」
「まぁまぁ、こんなところで立ち話もなんだ」
彼女が少年の肩にポンと手をのせ、土壁の一部をスプーンで指し示す。
意味が分からず、少年は首をかしげた。そんな彼を尻目に、彼女はひとさし指をくちびるにつけながら、何事かぶつぶつとつぶやいている。そして彼女は急にスプーンで土壁の一部を掘りはじめたのだった。かたい土壁がまるでアイスクリームのように滑らかに削られていく。数秒としないうちに、壁面にはある文字が刻みこまれていた。
『Bar odd-eye』
「バー・オッドアイ?」
瞬間、土の壁が地響きを立てながら震えはじめる。次いで起こった出来事に、少年は仰天していた。なんと、文字が刻まれた壁面の土がパラパラとこぼれ落ち、その奥から木製の扉が出

現したのだ。扉にはオープンの看板が掛けられており、ふりこのようにゆれている。
「さぁ、入ろうか」
デラはドアノブに手をかけた。

※※※

その列車事故が起きたのは、本当にとつぜんのことでした。
轟音と共に列車が大きくゆれ動き、多くの乗客が重なりあっていきました。列車はレールから外れて蛇行を何度もくりかえし、最後には横転して、黒煙をあげながら古いトンネルの中へとつっこんでいったんです。
気づくと、僕たちは大量の土砂に囲まれていました。
車内は狭くて、薄暗くて、とても怖かったのを覚えています。
「母さん！　セロ！」
僕は必死に叫びました。
セロというのは僕の弟です。僕らは三人家族で、物心がついたときにはすでに父親はいませんでした。僕らは田舎町のそのまたかたすみでひっそりと暮らしていたんですが、もともと眼病になりやすい血筋だそうで、たびたび、となり町の眼科医へ足を運んでいました。弟のセロ

は特にその影響が強く出ているらしく、かわいそうなことに、両目の視力がほとんどありません。でも、手術をすれば治る。お医者さんのその言葉を信じ、弟は手術を受けたんです。その日は、ちょうど目の手術を受けた帰りの日でした。

「……おにぃ……ちゃん……」

呻き声が聞こえ、僕はかけつけました。

弟はすぐに見つかりました。割れたガラスで少し手を切っていましたが、とりあえず命に別状はなさそうでした。でも、母さんは手遅れでした。母さんは弟をかばうようにして、すでに息絶えていたんです……。

「おにいちゃん、お母さんは？」

弟が僕に尋ねます。僕は言いました。

母さんは大丈夫。母さんは助けを呼びに列車の外へ出ていった。

僕がそんな嘘をついたのは弟の目を守るためでした。手術を終えたあと、医者が言っていたんです。今日から一週間、弟に強いストレスは絶対に与えてはいけないと。もし、与えてしまったら、弟の目は二度と回復しないと。母親が死んだと分かったら、それはどれほどのストレスでしょうか。だから、僕は母の死を言えなかったんです……。

それから、僕ら兄弟は長い時間を暗く狭い車内の中ですごしました。

となりの車両へ行ってみようともしました。でも、大きくひしゃげた扉は力を加えてもびく

ともしませんでした。車内の窓はすべて割れてはいるものの、土と砂の壁で外界とはさえぎられており、手が出せません。下手に動かそうものなら、土砂が流れこんできて今度こそ生き埋めになりかねませんでした。

暗闇と、飢えと渇きと不安が僕らを襲いました。

それでも、僕らは頑張りました。

食べ物と水は土砂から掘りおこした荷物の中からちょうだいしました。それはわずかばかりでしたが、こども二人ならなんとかなりました。暗闇も、慣れてしまえばさほどつらくはありません。不安はふたりでゲームをしてまぎらわせました。弟の見たいものを当てていくゲームです。鳥、母さん、太陽、ソーセージ……僕はけっこう当てましたが、それでも一番は当てられませんでした。うんうんと唸る僕を見て、弟はニヤニヤと笑っていました。だけど、そうやってすごしていくうちに、どうしようもない、ある問題が出てきたんです。

「おにいちゃん、変な臭いがしない？」

母の遺体の臭いでした。

見ると、母の顔には変な模様が浮きでていました。腐りはじめていたんでしょう。僕は弟に乗客の死体が腐ってきたのだと説明しました。そしてそれにともなって、僕はその死体を埋めなければならなくなったんです。

「お母さん、無事に外に出られたかな……」

その日、僕は母親を埋めました。
弟のつぶやき声をよこで聞きながら、ふるえる手で、ひとりで、静かに……。
泣き声をあげることはできなかった。出せばきっと止められなくなるから。そしてもし弟にそのわけを訊かれでもしたら、僕はごまかせる自信がなかった。自分の母親を自らの手で埋めていく行為は思っていた以上に並々ならぬ感情を僕に与えていきました。
罪悪感、苦痛、懊悩……。
僕は声が出ないようにくちびるを噛みしめ、手を動かし続けた……。
僕たちが助けだされたのはそれからすぐのことでした。生き埋めになっていたのは五日間と三時間。僕がベッドの上で目を覚ましたのが六日目のことで、僕よりすこしはやく目覚めていた弟の耳にはすでに母の死の報せが入っていました。
結局、弟の目は治りませんでした。
僕の嘘が、弟から光を奪った。
高いところから落とした花瓶はくだけるが、低いところからなら割れずにすむことだってある。もしかりに、あのとき正直に母の死を告げていたら、弟に希望など与えなかったら、セロの目は治っていたのだろうか。こんな自問自答に意味がないことは分かっていた。何が原因だとは言い切れない。
だけど、それでも考えずにはいられなかった。

僕は弟を守れなかったのだ。

その後、身寄りのなくなった僕らは森の麓の孤児院に入ることになりました。

列車事故の生還者という肩書きはもの珍しく、僕らは注目のまとでした。そのせいでからかわれることも多く、殴り合いの喧嘩になったこともあります。でも、それ以上に僕のなかできつかったのは弟と顔をあわせることでした。弟の目もとに巻かれた包帯の下を想像することがなによりも怖かった。包帯に隠された弟の目はいったいどんな風に僕を見ているのだろう。弟はいつも優しかったが、もしかしたらその目は恨みに淀んでいるのかもしれない。いや、失望を滲ませているのかもしれない……。

想像するだけで、僕はたまらなくなった。

そして、ある晩のことです。

院長がなにか大きい荷物をもって外へ出かけていったのです。僕はトイレから戻る途中で偶然それを目撃し、こっそりとそのあとをつけていました。院長は森の深い方へどんどん進んでゆきます。そして、すこしひらけた場所にたどりつきました。そこには黒い荷馬車がとまっており、そばには白装束を着た奇怪な人たちと、緑衣のローブをはおった小さい男が闇夜にそっと佇んでいました。

僕は木のうしろからそれをのぞき見ていました。

院長は袋に入った銀貨を受けとったあと、持ってきた荷物を相手に差し出しました。そのと

き、中身の確認のためか荷物の入り口がすこしだけあけられたんです。瞬間、僕はアッと声を出していました。セロの顔が見えたからです。弟はしゃべれないように猿ぐつわをかまされていました。薬かなにかを使われているのか、眠ってはいないようでしたが、ひどくぐったりとしています。

僕の声は森の静寂によく響きました。

みなが僕の方にふりかえります。

院長、雲掃人形、緑衣のローブを着た男、そして、セロも……。

弟が僕だと気づいていたかはわかりません。出した声は意味をもたないほどに短いものでしたから。でも、その顔はたしかに助けを求めていました。目の包帯と猿ぐつわによってほとんど顔の表面は見えなかったけれど、それだけは伝わってきました。そしてあのとき、僕はどうして逃げてしまったのでしょうか。

僕は気づくと樹海のなかを走っていました。

雲掃人形たちに追われながら、僕の頭は考えます。

あのとき、たとえ院長たちに立ちむかっていたとしても、僕は勝てなかったでしょう。こどもひとりの力ではどうすることもできません。僕は殺されて、弟もまた悪い大人たちの餌食になる。この事実は変わらない。でも、それはいいわけだった。僕の足は弟の方へと向かうべきだった。どんな結果がまっているのであれ、僕は弟の、セロの兄なのだから。

雲掃人形たちはもう見えなくなっていた。
だけど、僕の足はとまらなかった。
殺されるのが怖かったわけじゃない。ただ、心のどこかで、セロの目を想像する日々にたえられないと思っていた。そして僕はこの状況を利用して、弟の目という呪縛から解放されようとした……。
それに気づいたときでした。
よこから、すさまじく強烈な視線を感じたんです。
ハッとしてふり向くと、僕のすぐとなりにあの緑衣のローブをはおった男がいました。
彼は僕のよこにぴったりとくっついて離れませんでした。見ると、そのフードのなかで、虹色に輝くふたつの不気味なマンダラ模様がグルグルと回転しています。
あとは、お察しのとおりです。
僕は恐怖に足をとられて道を踏みはずし、山の斜面を転んで崖の下へと落ちていった。そしてその結果、右目を失った。いや、もしかしたら本当はあの不気味な目に足をとられたのではなく、弟を見捨てたことにたえきれず、身を投げただけなのかもしれません。
長いこと話を聞いていただきありがとうございました。
これだけ話していていまさらですが、自己紹介がまだでしたね。
僕の名前はモアベルです。モアベル・ブラックパッチ。

これが弟を見捨てた最低の兄の名です。
最悪の、罪の名です……。

「弟はもう、生きてはいないでしょう……」
「……」

デラは何も答えなかった。
かわりに、グラスの中の氷がカランと小さい音を響かせる。
店内はとても静かだった。肌をうつ気持ちのよいリズムと、耳をなでる甘く軽快なメロディが話の邪魔にならないていどにバックで流れている。室内はうす暗かったが、居心地の悪さはない。電灯は優しいオレンジ色で目に優しく、また店内のところどころに刻まれた綺麗な色の文字列は、意味が分からずともどこか目をひく視覚的な魅力を持っていた。
見れば見るほど、バー・オッドアイは不思議な空間だった。
内装はほとんどが光沢感のある木彫の代物で、レンガで成された周囲の壁には女性の写真がたくさん張ってあった。そのなかには、ほとんど裸に近いような女性もいる。あまり子どもがくる場所ではないようだ。ムードのある店内はそれほど広くなく、カウンター席のほかにはいくつかのテーブル席があるだけだった。
いまは、デラと少年以外に客の姿はない。

当のふたりはカウンター席の方に並んで座っていた。
目の前には多くの酒ビンが並べられており、どれもがユニークな形状と鮮やかな発色を示している。また、そのオシャレなお酒たちに囲まれながら、ひとりの美女がもの静かにグラスを拭いていた。彼女はどうやらこの店のウェイター兼バーテンダーのようだ。さらさらとした緋色のミディアムヘアが美しい。大きなバストと露出したフトモモはとても扇情的で、少年には少し刺激が強かった。しかしそれ以上に彼の目をひいたのは、彼女の頭に生えた獣の耳とお尻から下がるしなやかな尻尾だった。
「オンボロバードが前に言っていました」
グラスに注がれた赤い液体を見つめながら、少年は言う。
「瞽女の宿は……何かが見えなくなった人たちがくる場所だって……つまり、僕が見えなくなったもの、いや、見ようとしなかったもの……それは僕の過去……弟を見捨てて逃げた、恥ずべき罪の記憶……」
少年が頭を抱えてうつむく。
と、デラはようやくその口をひらいた。
「私たちは長いあいだ、ずっと君たちを見てきた」
そう言って、彼女はどこか遠くを見つめるように話しはじめる。
「君たちに力を与え、進化の系譜を導き、この大地に雨をふらせ、海をつくり、森をひろげて

山をこしらえた。そうして生まれた君たちは驚異の存在だった。君たちは長い歴史の中で愚かなこともしたし、賢いこともした。そりゃあ、なかには過去を見ようとしなかった者も大勢いる。だけど、いま問題なのは、君が見ようとしていないのは過去じゃないということさ。君が見えなくなっているのはね、君の、未来だよ」

「ぼくの……未来？」

「あぁ、君の可能性と言ってもいい」

困惑する少年に、彼女は微笑みながら続けた。

「弟くんのことは残念だったね。助けられなかったこと、逃げてしまったこと、その罪悪感は計り知れないものだろう。だけど、君がいまここで自分の世界を閉ざしてしまったら、あの少女はどうなるんだい？　彼女はまだ生きてるはずだ。原書協会は彼女を人身御供にして別の世界への扉をあけるつもりでいる。彼らが使うのは外法魔術といってね、その儀式は月の影響を強く受け、魔力が高まる夜分にならないと始められない。つまり、彼女が生贄にされるまでまだ時間はあるということだ」

デラはそう言うと、懐から黒い小箱を取りだした。

「その箱は？」

「あけてごらんなさいな」

うながされ、少年は小箱をあけてみる。

すると、中には眼球がひとつおさめられていた。目と目が合い、少年は驚いたが、その眼球が見なれた灰色の瞳をしていることに気づき、彼はハッとして彼女に言った。
「ぼくの……右目ですか？」
「そうさ。ようやく修復が終わってね」
言われてみれば、あれだけ血流をほとばしらせた無惨な刺し傷が球面のどこにも見当たらなかった。それは見事としか言いようがなく、表面には水晶のような光沢感さえある。
「さ、私がはめてあげよう」
そう言って、デラが銀飾のスプーンを指でくるくると回す。
少年は眼帯をはずしながら、彼女と最初に出会ったときのことを思い出していた。
あのとき、わけもわからぬうちにスプーンを眼窩につっこまれ、有無を言わさず右の眼球をえぐり出された。そしていま、その眼球が返却されるのだ。
少年がグッとからだをこわばらせる。
デラはスプーンのくぼみに彼の眼球をのせると、摘出したときとは反対にゆっくりと彼の眼窩に差し入れていった。痛みはなかったが、やはりどうにも慣れない。脳みそがもまれているような気分だった。視神経がどうなっているのかだとかそういった疑問はつきないが、考えるだけ無駄だろう。眼球がはまると、彼女はまたゆっくりとスプーンを引き抜いていく。
少年は何度かまばたきをして、はめこんだ眼球をなじませていった。

「具合はどうかな？」
「大丈夫です。問題、ありません……」
あるべき場所へと戻った右目に、視界が灯っていく。
と、デラは少年の頭を優しくなでながら諭すように言った。
「すべてが報われる世界じゃない。だから、つらい過去に目を瞑ることがあったっていい。でも、その瞳で未来を見ることだけは忘れないでいてくれ。君に与えた力は世界を閉ざすためのものではなく、目には見えない可能性を視るための力なんだ」
「デラさん……」
その言葉は少年の心に深く突き刺さった。
彼は深々と頭を下げると、カウンターに置いていた眼帯へと目を向ける。これはもう自分には必要のないものだろう。彼は眼帯を手にとり、デラへと返却した。が、彼女はそれを受けとらなかった。彼女は少しだけ黙したあと、少年に向かって言った。
「それは、君がもっていてくれ」
「えぇ、かまいませんが」
なぜですか、と少年が訊く前に、彼女は続ける。
「私は他の職人たちから人に干渉しすぎだとよく注意される。自分の魔眼を世界にバラまいたときなど、それこそみんなから大目玉を食らったよ。眼球職人だけにね」

「……」
店内に、グラスを拭く音が響いた。
デラがしきりなおすようにせきばらいをする。
「まぁ、つまりだね、私はそういうサービス精神が旺盛なタイプの神さまなんだ。これは性分みたいなものだから、もう何があっても治らない。だから、今回もすこしばかり出しゃばろうと思うのさ。それで、君はどうだい？　自由意志の申し子よ。空いた穴はもうふさがった。心の準備はできているかい？」
少年はグラスの中の飲み物を一気に飲みほした。
そして、両目を輝かせて強くうなづく。

第三章、誰がために鐘は鳴る

果てなく続く地下迷宮。
その迷い路を抜けた到達点のひとつに、岩窟堂とも呼べる巨大な空間があった。
見た目は円形闘技場を縦長にしたような形で、一定の高さごとに設けられた通路が段状になっている。そのため、上に行くほど岩窟堂の土壁は広がりを見せていた。そしてその無尽蔵な広がりはやがて揺れうごく無数の燈火と交わっている。暗闇に燈る緋色の輝きは邪悪な美しさをもっており、見る者にひどく惑乱的な印象を植えつけていた。
と、耳朶を奇妙な音が掠めていく。
それはコウモリの鳴き声に似た怪音だった。
ギイギイと軋むその不快な音の正体は、燈火を吊るす鎖の音だ。
見果てぬ天井からは長さの異なる鉄鎖が何本も垂れ下がっており、空中を漂っていた燈火たちはその先端に結われた鉄籠の中で命を燃やしていた。それが洞窟から吹きぬけてくる唸り声のような風に煽られて、ギイギイと喚いていたのだ。
精気を帯び始めた暗黒の地下世界で、原書協会の目的は着々と進行していた。
信徒たちはいま、無言でそのときを待っている。

岩窟堂の段上にて佇む彼らの姿は異様なものだった。ランタンの灯が揺らめくたびに、その白い頭部にさまざまな陰影が生じ、マスクの下で目や鼻、口といった部位が動き回っているかのような錯覚を引き起こしている。

だがしかし、彼らの異様さを遥かに凌駕するものがあった。

それは岩窟堂内に君臨する五匹の大蛇だ。

大蛇はそれぞれ空中に身を固定し、五つの方角からまっすぐ首を伸ばしていた。そしてちょうど岩窟堂内の中心地点で向かい合っている。よく見れば、大蛇の内部は一本の通路になっており、その腹部から真下へと何本かの石柱が伸びていた。巨大な頭を支えるために必要だったのだろう。彼らは膨大な石のブロックによって象られた建造物であり、精巧にできた造り物だったが、その迫力は凄まじく、対峙する者の魂をことごとく震撼させていた。

理解を超えて分かる。

これはただのオブジェなんかではない。

明確な意図をもって造られた、何かなのだ。

そしてその意図とはあまりよくないものに違いない。なぜなら、五匹の大蛇のうち四匹はそれぞれ目、耳、鼻、舌を鋲（びょう）のようなもので貫かれ、残りの一匹に至っては顔面の皮を剥がされており、首もとにだらりと皮の花弁を咲かせていたのだ。その残忍な意匠は惨たらしく、見るにたえない。

いったい何者がこれほどの建造物を造りあげたのか。
老朽化を受けた壁面はまるで本物のうろこのようであり、たゆたう燈火の灯にあてられ、実際に脈動しているかのようだった。また、彼らが剥きだした凶悪なアギトは十数人もの人間を丸のみにできるほど強大かつ巨大である。下顎に並ぶ牙は鉄柵で造られているが、ちょうどその真ん中で途切れており、そこから赤黒い舌がベロリと垂れさがって滑り台のようになっていた。さながら、獲物を狙っているかのように。
そう、その大蛇は生贄を欲していた。
くちなしの子、唖者の魂を。
大蛇たちの舌から深紅の液体がしたたり落ちていく。それは空中におどり出ると、長い時間をかけて下へと落ちていった。そして、小さな音を立てる。
……ピチャン……。
……ピチャン……。
……ピチャン……。
……ピチャン……。
五匹の大蛇が向かう先、そこは支えのない虚空だ。しかし、その真下には地底へと穿たれた巨大な穴があった。それは火山の噴火口を彷彿とさせるもので、地面が山形に盛り上がり、頂上を中心にして大きく落ちくぼんでいる。また、円形のくぼみは燃えるような赤い液体で満た

されていた。ゴポゴポと気泡を噴き上げるそれは間違いなく人間の血だろう。大蛇の舌をすべり降りれば空中へと投げ出され、そしてその先に待っているのは業深き血の池だった。
夜が極まっていく。魔力が昂っていく。時間が、少しずつ緩慢になっていく。
地下とは思えぬこの異空間で、いくつもの運命が胎動していた。
彼らは待ち続ける。刻一刻と迫る、その瞬間を……。
そんな中、それは突然、静かに起こった。
飢えと渇きに喘ぐ大蛇の口の内側で、石壁の一角に謎の扉が出現したのだ。
扉はゆっくりとひらいていった。そしてそのわずかな隙間から、何者かの目が周囲を警戒するように現れる。目はパチパチとまばたきをしながら左右を確認していたが、やがてその途中でなにかを発見したように動きをとめた。
視線の先にはひとりの少女がいた。
その少女は手足を縛られた状態で大蛇の口の中に横たわっている。
可愛らしい顔には目かくしがされており、囚われの身であることは明白だった。
「クーイ、クーイ……」
扉の隙間から、少年が声をかける。しかし、少女は気づかない。
少年はまわりに誰もいないのを確認すると、忍び足で少女のもとへと駆けより、彼女を抱きおこした。少女はいきなり触れられていよいよ殺されると思ったのか、抵抗しようと手足をバ

タつかせはじめる。そんな彼女に対し、少年は耳もとでささやいた。
「クーイ、落ち着いて。ぼくだよ」
聞きなじみのある声に、少女の動きがとまる。
そのすきに、少年は彼女の目かくしをとり、次いで、手足のロープをほどいた。
【どうしてここに？】
少女が少年の手のひらに指を走らせる。
「もちろん、たすけにきたんだ」
そう言って、彼は少女を立たせた。彼女はまだ少し戸惑っていたようだが、すべてをことこまかに説明しているひまはない。協会が少年の存在に気づいていない今が最大のチャンスだった。彼は少女の手をひこうと、彼女の手をとる。しかしその瞬間、少女はからだをこわばらせてしまう。少年に手を握られたからではない。彼女の視線は少年をとびこえ、その背後に向けられていた。
「……待っていたよ」
少年はハッとしてふりかえる。と、闇に潜んであの男が立っていた。
「必ずくると思ってたよ。しかし、まさかこんな風にくるとは思わなかった。あの木製の扉は眼球職人の力添えかな？　まったく、君といると本当に度肝を抜かされる」
怪事卿が石壁にできた扉を眺めながら、あごひげをなでる。

まずい――少年はあせった。扉の存在がばれてしまったということは、すなわち逃げ道を断たれてしまったに等しい。それにあの扉はいま、眼球職人の家である瞽女の宿に直結しているのだ。もし協会の信徒たちを呼ばれて押しよせられでもしたら、眼球職人である彼女がどうにかされるとは思えないが、とにかく面倒なことにはなるだろう。

少年のこめかみに汗が流れていく。

そんな彼の表情を見て、怪事卿は言った。

「安心したまえ。招待されてもない家におしかけるほど、私は礼儀知らずじゃない」

「いたいけな女の子に薬をもるのは礼儀知らずじゃないんですか？」

「これは痛いところをつかれてしまった。彼女には気の毒なことをしたと思ってるよ。協会が確保していた唖者のこどもが儀式の前日に死んでしまってね。代わりの者を急いで探さなければならなくなってしまったのさ。時間に余裕があれば、私もちゃんとしたルートから買ったんだが、今回は時間がなくてね。あの少女を使わざるを得なかったんだ。すぐに手配できそうなのは彼女ぐらいだった」

「最初から、狙っていたんですね」

少年はあの酔っぱらいから助けてもらったときのことを思い出していた。

あのどしゃぶりの中、颯爽と現れたこの男がどうやって自分たちに気づいたのかと不思議だったが、そのときはただの偶然と考えていた。しかし、すべては必然だったというわけだ。つ

まり、あの酔っぱらいも……。
「あのならず者は私の差し金じゃないよ」
少年の考えを読みとり、怪事卿はあわてて否定する。
「彼女はこの町では有名だ。ああいったもめごとは茶飯事さ」
茶飯事、その言葉で彼は思い出す。たしか少女もまた同じようなことを言っていた。
少年の瞳がクーイをうつす。すると、彼女はうつむき、手を震わせていた。
「どうやら、彼女から聞いてはいないようだね」
怪事卿は察したように言った。
「よかろう……何も知らないままではアンフェアだ。彼女の代わりに、私が語ろう。それでいいね？　お嬢さん。彼は君を助けにきたんだ。命がけでね。彼にはその権利があるし、君にはその義務がある」
少女は怪事卿の言葉に迷っていたが、やがてコクリとうなづいた。

※※※

今から一年ほど前、この町では革命の機運が高まっていた。
悪徳領主による圧制に、民衆は我慢の限界を迎えていたのだ。彼らは水面下で抵抗戦線なる

有志のチームを結成し、悪徳領主を討つ機会をうかがっていたが、なかなか時機を見いだせずにいた。しかし、治安は着実に悪化していた。民衆と領主との衝突は日に日に増えてゆき、気づけば、町では流血沙汰のもめごとが頻発するようになっていた。

そんなある日、少女はある行きだおれの男と出会った。

その男は移民の出稼ぎ労働者だった。彼は病に伏した妹の薬代を稼ぐため、北にある大きな町に出向くところだったが、足を休めようと立ちよったこの町で不運にも抵抗戦線と領主側とのいざこざに巻きこまれ、負傷してしまったのだという。

少女は善意からその男を家に招きいれ、彼の怪我を手当てした。

それから数日が経ち、男の怪我もだいぶ良くなったころ、町である事件が起こる。

抵抗戦線のリーダー格のひとりであった男が領主の私兵に殺されたのだ。しかし加害者であるはずの私兵にお咎めはなく、民衆の怒りはいよいよ爆発寸前となった。そしてその日、抵抗戦線は領主の殺害計画を決めた。決行は一週間後だった。

計画の話はすぐに少女の耳にも入った。

なぜなら、彼女の両親が抵抗戦線の幹部だったからだ。彼女はそれを聞いて、すぐに移民の男へと報せた。もし計画が決行されれば、しばらく町は慌ただしくなるだろう。そしたら町から出られなくなるかもしれなかった。ただでさえ移民は迫害に会いやすい。実際、移民が理不尽な理由で嬲り殺しにされたこともある。だから、彼女は男にできるだけ早く町を出ていくよ

うに言ったのだ。すべてを正直に話してね。
結果から言って、抵抗戦線の革命は失敗に終わった。
爆薬は予定どおりに作動したが、肝心の領主をしとめることはできなかったのだ。
それからほどなくして抵抗戦線のメンバーが捕まり、みな、等しくギロチンにかけられていった。そのなかにはもちろん、少女の両親もいる。
情報が洩れていたとしか思えぬほど速い展開だった。
お気づきのとおり、領主の殺害計画をもらしたのは少女が助けたあの男だ。
彼は少女から教えてもらった情報を領主側に売ってしまったのだ。
有志たちは英雄ではなく逆賊として散った。
両親が処刑されたあと、少女は遠縁のおばさんと暮らすことになった。おばさんはあまり少女に優しくなかった。これはもう、そういう人だったと言うしかない。しかし、それを決定づけたのは彼女たちの家に送られてきたいくばくかの金貨と一通の手紙だった。手紙にはただひとこと、すまない、と書かれていたという。
少女はそれから言葉を失った。
彼女がしゃべらなければ、おそらく革命は成功していただろう。
彼女のことはうわさとなって町中をめぐっていった。発信源は分からない。領主側の誰かが流したのか、それとも、少女のおばさんが感づいたのか。ともかく、彼女は町中の人から裏切

者として見られるようになった。なかには、お金欲しさに親を売った鬼の子なんて言い方をする心ない輩もいる。

革命が失敗に終わり、民衆は悲嘆に暮れた。

悪徳領主による横暴がこのまま永遠に続くのかと思われた。

しかしその矢先、事態は急変する。

革命の失敗から一か月ほどが経ったある日、悪徳領主が湖で死んでしまったのだ。

あれだけ多くの悲劇を招いた物語がこんなかたちで収束してしまうとは、なんという滑稽な展開だろうか。人の業は皮肉めいているとはいえ、そのお粗末さには時計仕掛けの神（デウス・エクス・マキナ）でさえも興ざめだったことだろう。だがしかし、とにもかくにも悪徳領主は消え去った。町は平和を取りもどしたのだ。ただひとり、裏切者の少女だけを残して……。

「まったく、運命とは残酷なものだ」

語り終えて、怪事卿はやれやれと嘆息する。

そんな彼に、少年は拳をにぎりしめて抗議した。

「彼女は何も悪くない……」

「そうだろうね。私も彼女が悪だとは思っていない。しかし彼女の行為がいささか軽率であったことは否めない。彼女の善意が革命を失敗させ、両親の首をはねる要因になってしまったの

は事実だ。町のみなが彼女のことを快く思わないのも当然だし、彼女が自分自身を責めてしまうのも無理はないだろう」
怪事卿は理路整然と少女の非を指摘する。
「ただ、ただ人を助けようとしただけじゃないか！」
少年は声を荒げて訴えていた。少女を見やると、彼女は静かに涙を流している。その姿があまりに不憫で、悲しくて……彼女の善意が報われなかったことがたまらなく悔しかった。
「彼女がここで生贄にされる道理なんてあるもんか！」
「そのとおりだ、少年。よく言った。彼女の過去と原書協会の行為にはなんの関係性もないのだよ。これは天の意志ではなく、人の意志なのだ。わたしはただ、彼女を賭けて闘うのならすべてを知ったうえでと思ったまでだよ」
その言葉は大蛇の口のなかで重々しく響いた。
「目を見れば分かる。彼女をあきらめるつもりはないんだろう？」
「あたりまえだ」
「では、これを使いたまえ」
怪事卿はそう言うと、自分の腰にぶら下げていた剣をひき抜き、少年に向かって投げわたした。そして少年がそれをキャッチするのを見届けてから、彼は大蛇の舌に突き刺してあった大きな鋲の中から一本の古い儀式用の剣をひき抜く。錆ついた刃は黒く変色していたが、人を殺

めるだけの力は十分にありそうだった。刃先が鈍く光っている。
「男と男がゆずれぬ想いをぶつけるときは、これと相場が決まっている」
つまり、決闘だ。
差し向けられた剣先に、少年は剣先を以て応える。
そのとき、ふたりのやりとりを見ていた少女がにわかに少年の腕へとしがみついてきた。彼女は首をよこにふっている。言いたいことは明白だった。しかし、少年は彼女の制止をふりきると、必ず勝つとひとこと残して怪事卿へと剣をはらった。
怪事卿はその一撃をなんなく避けてみせる。
ふたりは互いに剣を向けたまま、大蛇の口の中をゆっくりと回り出した。
口の中は狭くはないが、闘うには物足りない広さだった。ゆえに、軽々しく距離を縮めてしまうとすぐに殺し合いの間合いに入ってしまう。経験の乏しい少年にとっては、その間合いをつめるタイミングが重要だった。
「記憶は戻ったのかね？」
「さっき、ヘイロン司教から聞いたよ」
「先日、生贄にされた盲目の子は君の弟だったそうだね」
「盲と唖の生贄がふたりとも君の関係者とは、やはり君はどこか特別だ」
怪事卿が動きながら少年へと語りかける。

それは余裕のあらわれだった。彼の足どりには恐れや迷いなどは微塵もない。また、剣さばきからその立ちふるまいまで実に優雅だった。対して、少年は剣のかまえからして不格好であり、見よう見まねであることは一目瞭然だ。しゃべる余裕などもってのほかだった。

その圧倒的な差が、少年の心に不安を募らせてゆく。

不安は神経を内側から焼き焦がし、すぐに彼の剣を逸らせた。

少年が一気に間合いをつめより、剣の切っ先を怪事卿へと走らせる。

と、剣と剣がぶつかりあい、かたい金属音が打ち上がった。しかしその瞬間、少年の剣は怪事卿の剣によって受け流されるかのごとくはじかれてしまう。怪事卿のゴシックコートが大きくひるがえり、少年は勢いあまってそのまま前方へとつっこんでいった。目の前には手すりが並んでいる。その先は虚空だ。

少年はあわてて体勢を立てなおした。

両足に力をこめ、剣を石畳に突き刺して勢いを殺す。

彼の動きがとまったとき、そこはもう手すりスレスレの場所だった。すぐとなりは手すりすらなく、大蛇の舌がだらりと空中へ伸びている。もし判断が遅れていたら、つっこんだ先がずれていたら、少年は真下に広がる血の池へと真っ逆さまだっただろう。

紅蓮に燃える血だまりを見て、少年はノドを鳴らした。

そんな彼の背中に、怪事卿は語りかける。

「この儀式はね、月の満ち欠けに合わせて五人の不具の子を捧げなければならない。わたしたちが闘っているこの大蛇の口は言わば祭壇だ。ここで子どもの命を奪い、その亡骸を下の血泉へとつき落とす。原書協会はすでに四人の子らを葬ってきた」

彼はそこで言葉を区切った。

すると、絶妙な間で岩窟堂内に異変が起こる。

岩窟堂の最下層にオレンジ色の強い光源が発生したのだ。

どうやら、待機していた信徒が持ち場の燭台に火をつけはじめたらしい。燈火は円を描くように壁面を走り出し、やがて一周すると、岩窟堂内に巨大な炎の輪をつくりあげていた。そしてそれが完成すると、次はもう一段上の層でまったく同じことが起こった。炎の円環は段ごとにつくられ続け、その光は薄暗い岩窟堂の姿を次第に明らかにしていく。

少年は目をすがめていた。

ほとばしる熱風に目が眩む。

環状の、巨大な炎が迫ってくる。

岩窟堂の階層構造により、上の階に行くほど炎環のサイズは大きなものとなっていた。それがひとつ、ふたつと発生し、少年との距離をつめてくるのだ。それは爆弾の導火線にも等しいものだった。燃えあがる炎環が少年たちのいる大蛇の口の高さまできたとき、少年の存在は協会にバレてしまうのだから。

焦る少年の背後で、怪事卿は続ける。
「鼻の利かぬ子は、鼻を潰された大蛇の口の中で葬られた」
「耳の使えぬ子は、耳を潰された大蛇の口の中で葬られた」
「皮の至らぬ子は、皮を剥かれた大蛇の口の中で葬られた」
「目の見えぬ子は、目を潰された大蛇の口の中で葬られた」
並べ立てられる言葉の数々に、少年は奥歯を軋ませる。
彼の視線は岩窟堂をさまよい、それぞれの大蛇たちを無意識にとらえていた。
鼻を潰された大蛇とは、十二時の方向に見える大蛇のことだろう。そして耳を潰された大蛇とは三時の方向にいる大蛇だ。皮を剥かれた大蛇は五時で、目を潰された大蛇が七時。
つまり、弟はあの場所で……。
ドクン、と少年の心臓が鳴り響く。
心臓が赤児のおこした癇癪みたいにあばら骨を暴打していた。少年は本能的に目頭を指で押さえこむ。闇の引力が、彼の第六感を冴えわたらせる。彼の脳内ではいま、弟が斬殺され、血の池に放りこまれるその場面が鮮明にうつし出されていた。
「そして口のきけぬ子は――」
「させてたまるか！」
少年が咆哮し、とびかかる。その目は憎悪に歪み、血走っていた。

ふりおろした剣が大きな音を立てて怪事卿の剣とかちあう。と、ふたりのあいだに一時的な均衡状態が発生する。少年は力をこめて剣を押し続けたが、それ以上はどうしても動かなかった。一方、怪事卿はまだまだ余裕があるようで、まなじりをギラつかせる少年に向かって泰然として言い放つ。

「彼女が最後のひとりなんだ。いまさら儀式をとめることはできない。すでに四人もの不具のこどもが犠牲となっているのだ。そう、君の弟くんもね。彼らの魂をムダにするわけにはいかない。君だって、セロくんの死をなんの意味もなかったことにしたくはないだろう？」

「どの口がほざく！」

それは激昂が生んだ実力以上の一撃だった。

少年の剣が怪事卿の剣を押しはじき、続いていた均衡状態を打ち破ったのだ。この展開は怪事卿にとっても予想外のことだったようで、彼はバランスを崩したまま、その目をわずかに見ひらいている。

このすきに、少年は一気に斬りかかった。

彼は何度も何度も剣をふり下ろした。たて斬り、よこ斬り、ななめ斬り、ときには突きもおりまぜて、怪事卿に猛攻をしかけていく。相手はいま、はじめてリズムを崩していた。この千載一遇のチャンスを逃すものかと、少年は斬撃を叩きこんでいく。

が、彼の剣はまったく敵の本体をとらえることができない。

怪事卿は迫りくる剣撃をみごとに片手で捌いていた。
剣術の嗜みがあるのだろう。がむしゃらにふるった素人の、ましてや子どもの剣など相手になるはずもない。しかしそれを考慮したとしても、やはりその立ち回りは見事と言わざるを得なかった。後手という不利な条件を、剣の打ちこむ場所や角度を巧みに使い分けることでカバーしている。彼が少年の剣を避け、はじき、受け流すたびに、黒いゴシックコートがダイナミックに舞っていた。
と、そのゴシックコートが一瞬、ふたりのあいだに死角をつくる。
そしてその死角が晴れたとき、怪事卿は呆気にとられていた。
斬撃だったなら、彼は容易にはじき返していただろう。
だが、とんできたのは剣ではなく、少年の拳だった。
予想外のことに怪事卿の反応がわずかに遅れる。
その結果、彼は少年が放った渾身の一撃によってしたたかに殴りとばされのだった。
怪事卿がよろめきながら、二、三歩あとずさる。次いでハッとして少年の方へと向きなおった。この数秒の行動不能はまさに命とりだった。さすがの彼も、次の一撃に対処するにはあまりに無防備すぎる状態だ。これはもしかしたらからだのどこかを犠牲にしなければと頭のすみで考えていた。
しかし、彼が見たのは襲いくる斬撃ではなかった。

そこにあったのは、泣きながら歯を食いしばる少年の姿だった。
彼は自分の額を手でわしづかみにしていた。五指の爪が皮膚をやぶり、血を滲ませはじめている。剣はもっていたが、斬りかかってくるそぶりはなかった。肩で息をきり、相手を睨みつけるその姿は恐ろしく、またどこまでも悲しそうだった。
怪事卿が目をふせてつぶやく。
「すまない……いまのはたしかに失言だった」
ふたりのあいだに、やるせない沈黙が流れていく。
決闘は自然としきり直しになっていた。少年と怪事卿は再び間合いをとりあいはじめ、その剣先を互いに向い合わせていく。とはいえ、体力的にも、精神的にも、そして時間的にも終わりは近かった。
気づけば、未知の言語が汚穢に満ちた岩窟堂の中を反響していた。
呪文めいた音波はまるで無数の線虫のようだった。目や耳や鼻や口、そして毛穴にいたるありとあらゆる隙間から体内へと侵入し、彼らの脳を、ひいてはそのさらに奥底にある魂にまで這い進んでくる。脳漿が沸きたつような感覚に、少年は吐き気を覚えていた。見れば、血泉のかたすみにあのマンダラ眼の怪人が控えていた。怪人は古びた本を手に、壁ぎわに並んだ協会の信徒たちと謎の呪文を唱えている。七色に輝くマンダラ模様の目と、それをとりまく何十という奇怪な雲掃人形たち。彼らが織りなすその光景はまさに外法魔術の極みだった。

少年はあたまをふって怖気を払いとばす。
もう、時間がない。
炎環はすでに彼らのいる層のひとつ下にまで迫っていた。
怪事卿もまた少年と同じ気持ちだったのだろう。
彼は少年に向かって分かりやすく剣をかまえなおすと、最後の口上をはじめる。
「原書協会の張りめぐらしている根は広く、また恐ろしく深い。彼らの存在は世界中に根づいている。この地はそのひとつにすぎない。ここの先代領主は協会のパトロンだった。だが彼だけでなく、教団に加担している資産家や団体はまだまだいる。流れはとめられないのだよ。いずれ、人類はその扉をあける」
そこまで言って、怪事卿はひと息ついた。
そして小さき挑戦者の姿をその両まなざしに捉えなおし、彼は問う。
「少年よ、神の国を見てみたいと思わないか？」
「人を殺してまで見たいわけないだろう！」
「わたしは見たい！　是が非でもね！」
ふたりはぶつかりあった。
互いの信念が火花を散らし、燃えあがる。
瞬間、ひときわ大きい金属音があたりに鳴り響いていた。

空中にはじかれたのは――怪事卿の剣だった。怪事卿の豪奢で美しい、細身の剣。
「勝負はわたしの勝ちだ。さぁ、そこをどいてくれ」
「……」
少年は黙したまま動かなかった。彼は少女をかばうようにして立っている。彼がどけば、彼女は斬殺され、血の池につき落されるだろう。従うわけにはいかなかった。それがたとえ決闘の結末に背く恥ずべき行為だとしても。少年は怪事卿の前に立ちはだかり、するどい眼光で抵抗の意志を示す。
そんな彼を見て、怪事卿は残念そうに言った。
「……君の名前を、教えてくれないか」
「……モアベル・ブラックパッチ」
「……そうか、よい名だ」
そう言うと、怪事卿は少年へと肉迫した。
突き出した剣の切っ先は真っすぐに少年の心臓をとらえている。
そして一閃――彼岸花のように鮮やかな紅い血しぶきがあたりにとび散った。
少年はその瞬間、まさに言葉を失っていた。ほほにかかった血を拭うこともできず、ただ茫然として地面に尻もちをついたまま、眼前の不可解な光景に混乱していた。しかし数秒してから我にかえり、彼は叫ぶ。

「クーイ！」
その言葉で、周囲の時間は再び動きだした。
少女のからだから剣がゆっくりと引きぬかれていく。
彼女はよろめきながらあとずさり、虚空に続く大蛇の舌先にそっとくずおれていった。
少年は急いで立ち上がり、彼女へと手を伸ばす。
すべてが、スローモーションだった。
少女は血を吐きながら、だんだんと大蛇の口の外側へと傾いていった。少年はそれを必死に追いかけたが、脳だけが現実にとり残されているようで、手足はまるで悪夢のなかに沈んでしまったかのように重く、動かなかった。
そして、彼女が落下する。
最後の瞬間、少女の手は優しく少年の頬をなでていた。
「……あり……が……と……」
少女の口から途切れるように音がなる。
と、彼女の姿は巨大な血だまりの底へと消えていった。
少年は少女が飲みこまれる絶望の瞬間を、そのふたつの眼球に刻みこんでいた。大穴を食い入るようにのぞきこみ、少女の姿をさがす。が、彼女の姿はもうどこにもなかった。彼女の愛らしいあの栗色のクセっ毛も、鈴を張ったような目も、長いまつ毛も微笑みも、どこにもあり

はしなかった。
伸ばした手は力なくたれさがり、ただ空虚にまみれて右に左と揺れている。
彼女を喰った血の池はいまごろになって水しぶきを上げていた。
それはまるで奈落に住む亡者の王冠のように毒々しい。
少女は少年のために自らの命を差し出した。
少女は、少年の盾となったのだ。
沈黙を背に、少年は少女が沈んだ奈落の泉をじっと見つめ続けていた。それから、どれくらいが経ったのか。おそらく数秒と経ってはいないだろう。だがしかし、少年にとってそれはとてつもなく長い時間だった。彼は無意識に自分の手をほほに当て、そこに残るかすかなぬくもりに少女の面影をさがし続けていた。
助けられなかった。
悲劇的な結末が、彼の心に新たな衝動をめばえさせていく。
自己嫌悪と残酷な運命への憤り、このふたつが螺旋を描き、少年の全身にどす黒い業炎をほとばしらせていく。彼は苦鳴をあげていた。右目が熱い。凄絶な眼痛に脳がシビれ、心の奥底にぼやけた何かが投影されていく。
そのとき、岩窟堂にさらなる異変が起こった。
空中に吊られた無数の篝火が次々に火柱を上げはじめたのだ。

岩窟堂内は幾重もの巨大な炎環と、はるか頭上で噴き上がる火柱たちによって強烈に照らしだされていた。そこに存在するありとあらゆるものが曝けだされている。それは少年も例外ではない。本来であれば捕まっていただろう。

だがしかし、教団はいまそれどころではなかった。

血泉の水面がゴポゴポと沸きたちはじめているのだ。あぶくは血泉の五カ所から発生しており、だんだんと大きくなっていく。そしてそれが最高潮に達すると、そこから人のかたちをした五つの物体がゆっくりと顔を出したのだった。それらは血泉からできているらしく、顔や体の表面をドロドロと流動させていた。その見た目はまさに血深泥（ちみどろ）人形といった感じで、どことなく土塊の民を思わせた。

静寂がこの場を支配していた。

みながみな、言葉を忘れて見入っていた。

血深泥人形たちの顔に凹凸が生じ、ぐねぐねとその造形を深めていく。顔面に走るくぼみや突起は明らかに目や鼻を模していた。なかでも口は特に激しく波打っており、上下に引きのばされてゆくその姿はまるで絶叫しているかのようだ。

人形たちの変貌は有為転変として続くかと思われたが、意外なことに、終わりはそれからすぐにやってきた。人形の一体がひときわ大きく身を悶えさせたかと思うと、激しく飛び散ってしまったのだ。そして残りの四体もそれに続くようにかたちを崩しはじめ、そのまま血泉の中

に溶けこんでしまう。血泉は大きな渦を水面に発生させていたが、やがてそれも静まり、もとの何の変哲もない血泉に姿を戻してしまうのだった。

いまのはいったい何だったのか。

信徒たちは無言で顔を見合わせていた。

が、少年と怪事卿のふたりはいまだ血泉を見つめ続けていた。いや、目が離せなかったという方が正しい。高い位置から眺めればその不可解さがよく分かる。水面があまりに静かすぎるのだ。それは液体というよりは、むしろ個体のようである。

そう思った瞬間のことだった。

血泉が眩い光を放ち、その表面に神秘的な紋章を浮かび上がらせたのだ。

紋章は迷路のようであり、傍観者たちの意識を次々と引きこんでいく。古代文字を想起させる独特のデザインは彼らの皮膚に名伏しがたいイメージを叩きつけていた。ナニカがくる。はるか遠方より次元の壁を破壊して、とてつもなく強大なナニカがひらかれる。

その天啓はまさに現実へと近づきつつあった。

血泉の内側から、すさまじい轟音が鳴り響いてきたのだ。

地鳴りとも雷鳴とも異なるその破壊音はまさに扉をひらく前のノックだった。

轟音――扉が叩かれる。

轟音――扉が叩かれる。
轟音――扉が叩かれる。

断続的な鳴動は血泉という頑丈な扉を暴打し続け、現実と非現実をつなぐ蝶番を少しずつ綻ばせていった。そのたびに地面がゆれ、篝火の炎が狂ったように乱舞する。頭蓋を砕き、意識を破り、魂へと突き刺さるその激震は傍観者たちの理性を蝕んでいった。彼らの脳裏に、存在するはずのない光景がうつし出されていく。

――燃え盛る闇。
――凍てつく光。
――咲き誇る月。
――落ちる太陽。

瞬間、血泉が大爆発を起こした。
凝血の残骸が四方八方へと大量に噴き上がっていく。
それらは空中で固体から液体に戻ったようで、岩窟堂に血とも泥ともつかぬ不快な濁水を喧然と撒き散らしていった。朱色の雨が降り注ぎ、信徒たちの白装束がたちどころに赤黒く染ま

っていく。とはいえ、そのような瑣末なことを気にする者などひとりもいなかった。みな、血泉という扉を破壊して現れたそいつに目を奪われていた。
「少年、これはいったい何だろうか……」
「僕が知るわけないでしょう……」
少年は答える。
それはまさに人外境の化身だった。
シルエットは人間のそれに近いが、からだは巨人のように逞(たくま)しく、肌はゾッとするほど深い青色を呈していた。また、卵形の頭に口はなく、頭頂部から放射状に裂け目が入っており、その内部で縦に並んだいくつもの眼球がギョロギョロと蠢いている。冥道より顕現された異次元の怪物はとかく巨大で、血泉から上半身だけを出している状態であったにもかかわらず、頭の位置は岩窟堂の中層にまで届いていた。そして、その強靭な双腕は伸ばせば岩窟堂の両壁に触れられるほど、長い。
岩窟堂内から音が消える。
少年も、怪事卿も、息をのんでいた。
埒外の超生物を前にどうすべきか考えあぐねていたのだ。
青き巨怪もまた黙して穏やかであったが、それは一時のことでしかなかった。彼は自らをとりかこむ矮小な存在たちに気づくと、その屈強な拳と拳を広大な胸板の前で荒々しく打ちつけ

合い、身の毛もよだつ大咆哮を周囲に放ったのだった。
巨怪の大音声が岩窟堂を激しく揺らす。
その場の誰もが電撃をあびたように硬直していた。鼓膜こそ破れなかったが、精神の支柱のようなものは完全に打ち砕かれていただろう。信徒たちは壁ぞいに立ったまま、しばしのあいだ放心状態となっていた。
そんな彼らに向かって、巨怪は剛腕を振りおろす。
一瞬のことだった。
巨怪の手のひらが地面に減りこみ、信徒のひとりを圧壊させたのだ。彼は破裂し、あとかたもなくはじけとんでいった。その威力はすさまじいものだった。打点を中心に大きなくぼみが地面に穿たれ、そこから四方へと長い地割れが広がっている。岩窟堂には衝撃による余震が残っており、周囲の岩壁からパラパラと砂塵が落ちていた。
巨怪が手のひらを持ち上げる。
と、粘っこい鮮血が糸を引いて伸びていった。
この惨劇を皮切りにして、悲鳴がいたるところで上がり始める。
巨大な手のひらは信徒たちを虫けらのように圧し潰していった。直撃を受けた者は一瞬で厚みを失い、直撃を免れた者もまたからだの一部を失った。地面で身をよじっている者がまさにそういう犠牲者だ。彼の両足はすりおろされたように途中で消えていた。それはまるで使いか

けの赤いクレヨンのようだった。
岩窟堂は見る間に地獄絵図となっていく。
二本の剛腕が大蛇のひとつを圧し折り、地面に叩き落とす。それに巻き込まれ、多くの信徒が下敷きとなっていった。頻発する地震は岩窟堂内の足場を脆くさせ、不幸な転落死を誘発していく。なかには、足を折って動けぬまま、燈火の油をかぶって生きながら焼かれてしまった者もいた。
阿鼻叫喚だった。
青き鉄槌はどこまでも無慈悲だった。
その標的は無論、信徒たちだけにとどまらない。
少年と怪事卿は大蛇の口のなかで岩窟堂の崩壊をまざまざと見ていた。怖いもの見たさという感情もたしかに少しだけあったが、その大部分は下手に動くと標的にされかねないというある種の本能的な判断によるものだった。とはいえ、そんな薄っぺらな人間の本能など、怪物にとっては紙切れも同然だ。
今まさに、少年らは次の獲物として認識されていた。
大蛇の口はちょうど巨怪の頭の高さにあったため、彼らには巨怪の頭部が信徒たち以上にはっきりと見えていた。青い皮膚の裂け目からのぞく縦列眼球はすべて綺麗な緑色で、超常的な力強さを発している。その殺伐とした邪眼の群れに見つめられ、少年は脊髄が冷たくなってい

くのを感じていた。
ふたりのからだを黒い影が覆っていく。
巨怪は右手をうしろに引き、力をためていた。
「まずいぞ、少年……これは逃げた方がよさそうだ」
怪事卿がゴシックコートをひるがえす。彼は床に転がる自分の剣を拾うと、大蛇の口からすばやく踊り出てそのままいずこかへと走り去っていった。少年もそれにならって大蛇の中を走っていく。が、それを追いかけるように巨怪の拳がとんでくる。
唖の大蛇は頭から豪快に粉砕されていった。
石のブロックが火山弾のごとく岩窟堂内に飛散していく。
少年の足場が大きく傾き出していた。見ると、大蛇を支えていた石柱のほとんどが折れている。そのせいで通路が自重に耐えきれず落ちはじめているのだ。通路の角度は見る見る後方へ下がっていく。少年は後方へ引っ張られながらも懸命に走った。そして通路が崩れ落ちる寸前にジャンプし、なんとか壁側の通路にとびうつることができたのだった。
息を荒げながらふりかえる。
そこには通路の欠片も残っていなかった。
視線を下ろせば、半壊した石柱がかろうじて並んでいる。最下層では大量の瓦礫が積まれていた。大蛇の成れの果てだ。あと数秒遅れていたら、少年はあの中に埋もれて死んでいただろ

う。まさに間一髪だった。
そう思った少年は立ち上がろうとしてふとその動きをとめる。
自分はなぜこんなに必死に逃げているのか。もうすべてがどうでもよくなっていたはずだった。クーイを助けられなかったばかりか、逆に彼女に助けられ、絶望の渦中で自暴自棄になっていた。それなのに、どうしてこんなにも生に執着しているのか。
この行為になんの意味があるのだろう。
少年は奥歯を噛みしめる。
そのとき、彼のからだを巨大な影が覆っていった。気づくと、巨怪が再び少年に狙いをつけていた。壁にとまった蠅を叩こうとでもするかのように、真っ青な拳がとんでくる。少年は逃げようとしたが、頭の中に一瞬、卑怯者という言葉が浮かぶ。それに気をとられ、彼の足は鈍り、回避が遅れてしまうのだった。
巨怪の大拳が少年へと豪速で肉薄する。
押し寄せる空気の圧に、体は自由を失っていた。
押し寄せる怪気の圧に、心もまた自由を失っていた。
潰される――と思ったその瞬間、視界を覆う拳はなぜかその動きを止めていた。少年もまた愕然として動けなかった。しばらくは何が起こったのかも分からなかった。彼は視界を埋めつくす巨大な青色をただただ見つめ続けるだけ。しかしそのうち、視界の端に見覚えのある銀色

の物体を発見する。それは神々しい銀の光気を放つ、一本の美しいスプーンだった。
「デラさん！」
「やぁ、なんだか大変なことになっているね」
こともなげなセリフをくちびるにのせて、彼女が優しく微笑する。
いつのまにか、少年のすぐうしろに黒衣の淑女が佇んでいた。驚くべきことに、彼女はあの巨大な拳を銀飾のスプーン一本だけで押し止めている。剛腕はいまなお彼らを殴殺せんと力をこめているらしく、腕の筋肉をピクピクと震えさせていたが、たった一本のスプーンに力負けしていた。
そしてデラがしなやかに腕をふる。
と、スプーンが眩くひかり、怪物の剛腕をはじきとばす。
その威力は凄まじいものだった。見れば、彼女のひとふりは怪物の剛腕のみならず、怪物の巨体までをも揺り動かし、反対側の壁へと激突させている。衝撃で岩壁が崩壊し、砂煙を巻き上げながら無数の岩石を落としていた。
「くるのが遅れてすまなかった。予定外のことがあってね」
「いえ、助かりました。でも、僕にはもう、なにがなんだが……」
「まぁまぁ、落ちつきたまえ。これはつまり、協会の儀式が失敗したのさ」
「儀式が失敗？　でも、クーイは……」

少年は目をふせた。彼女は死んでしまった。血を吐き、くずおれ、大蛇の舌から滑り落ちて血泉に身を沈めた。少年はその絶望の瞬間を思い出す。そしてあることに思い当たった。少女は落ちる直前に、ありがとう、と言っていた。声は口から流れる血のせいで聞きとりづらかったが、たしかに聞いた。つまりあの瞬間、彼女は唖者ではなくなっていたのだ。

少年がそのことを伝えると、デラはなるほどとうなずいた。

「少女が声をとり戻したために、扉がある種のエラーを起こしたわけだ」

「エラー？　誤作動ってことですか？」

「あぁ、それで本来つながる世界とは違う世界につながったんだ」

「じゃあ、この怪物はその世界の？」

「そのとおり。こいつは異界に咲く花、クェルだよ」

その言葉には聞き覚えがあった。

「クェル？　クェルってたしか……」

「君も飲んだあの緑色のやつさ。この花が原料なんだ」

「花？　こいつが――」

少年は巨怪を見やり、絶句した。

巨怪の大咆哮が砂塵の幕を消し飛ばしていく。と、そこにあったのはたしかに花だった。見るも悍ましい、そびえ立つ魔界の大輪だ。巨怪の頭部は裂け目から放射状に割れ広がり、その

太い首から六枚の青い花弁を見事に咲かせていたのだ。剥き出しとなった顔面は赤黒く、さながら筋肉の塊だ。全方位に配列された眼球たちが様々な方向に蠢く相貌は面妖だったが、頭頂部から噴出される緑色の発光粒子は幻想的だった。巨怪は花弁に収納されていた長い触手を何本も空中でうねらせ、怒髪天を衝くと言わんばかりにこちらを威嚇している。

首から上は花で、下は巨人。

その姿はまさしく異次元の魔物だった。

「なかなかキレイだろ？」

「デラさん！　うしろ！　うしろ！」

少年がハッとして叫ぶ。背後から、怒りに満ちた巨怪の手のひらが迫ってきていた。屈強な五指は岩窟堂の弧を描く外周を破壊し、少年らを圧殺せんとばかりに壁と通路を薙ぎ払っていく。噴き上がる殺意と瓦礫はまさに土石流のごとしだった。そしてその押し寄せる崩撃が彼らの視界を埋めつくす。

瞬間、デラはマントをはためかせ、少年を抱えたまま上空へと跳躍した。

彼女は間一髪で巨怪の薙ぎはらいをかわしたが、巨怪の頭上へおどり出てしまったことにより、今度は触手のむれに襲われてしまう。うねり狂う無数の触手が宙に舞う彼女を捕えようと四方八方からとんでくる。が、彼女はまったく怯まない。彼女はそれらを銀飾のスプーン一本ではじき返していく。

その応酬は見事なものだった。
とはいえ、巨怪クェルもまた尋常ならざる存在で、デラの動きを触手で引きとめているあいだにその強靭な剛腕へとひそかに力をたくわえ続けていた。そして彼女が触手を討つ一瞬のすきをつき、死角から、渾身の一撃を彼女に叩き込む。
激突――デラと少年がふっとんでいく。
彼女らは石壁の一角へと勢いよく叩きつけられた。その衝撃はすさまじく、壁面は大きく凹み、砕けた土石が地滑りのように落下してあたりに砂塵を巻きあげていた。
と、その砂塵の隙間から飄然とした笑い声が響く。
「はっはっは。大丈夫かい？」
「かなり衝撃的でしたが、とりあえずは……」
少年が頭を押さえながら言う。
彼はデラにうしろから抱きしめられるかたちで守られていた。どうやら、彼女がクッションになってくれたおかげで怪我をせずにすんだらしい。当然、彼女にその分のダメージがいっているはずなのだが、当の本人は笑う余裕もあるほどで、巨怪の一撃などまったく意に介していなかった。
「よし、つかまっていたまえ」
「は、はい！」

彼女は足場を崩し、土砂と一緒に地面へと飛び下りた。すると、彼女の漆黒のマントがコウモリの翼のように広がっていく。ふたりは物理法則を無視し、そしてそのままゆっくりと地面に着地した。

最下層はひどいありさまだった。砕けた石畳に堆積した土砂と瓦礫、鼻を焦がす炎の臭いと無残に転がる信徒の屍。まるで戦で焼き払われたかのような惨憺たる光景だった。ふとよこを見ると、折れた石柱のあいだに半面を潰した大蛇の顔が転がっている。すべてはあの超生物がもたらしたのだ。少年は慄然とした思いでそびえ立つ異界の大輪を見上げる。

巨怪は再び大咆哮をはりあげていた。

デラはそれを見て、やれやれと首をふる。

「気は進まないが、こうなってはしかたがないか……」

そう言って、彼女は銀飾のスプーンを水平にかまえなおした。

その瞬間、驚くべきことが起こった。なんとスプーンの柄と首が伸びはじめ、一本の美しい棒へとそのフォルムを変化させたのだ。その形状は神槍のようでもあり、また錫杖のようでもあった。美麗な装飾をほどこされた瀟洒（しょうしゃ）な棒は、埋めこまれた宝石の輝きと共鳴するかのように神々しい銀光をまとっている。彼女はそれをグルグルと巧みにふりまわすと、最後にその切っ先を巨怪に差し向けた。

そして、魔女と魔獣がぶつかり合う。

それはこの世の終末さえも想像させる熾烈な一戦だった。
巨怪が剛腕をふるい、執拗にデラを追撃する。と、デラは流れるような動きでそれらをすべてかわしてみせた。彼女はあらゆるものを足場に利用し、岩窟堂のなかを縦横無尽に駆けめぐる。そのたびに、変幻自在の彼女のスプーンが眩い銀光をほとばしらせた。それはときに剣となって巨怪の肌に傷をつけ、またときに鞭となって巨怪の腕を絡めとる。
彼女の一挙一動はまさしく神の領域だった。
が、巨怪もそう簡単には終わらない。
クェルの巨躯は見た目どおりの頑丈さを誇っており、並たいていの攻撃ではまるで歯が立たなかった。デラはそれでも着々とダメージを負わせていたが、その青い肌は傷がつくとすぐに粘性の物質を出して負傷か所の再生をはじめてしまうのだ。加えて、巨怪は怒れば怒るほどパワーとスピードが上がるタイプのようで、デラに攻撃を避けられるたびに大拳はより危険度を増していく。
戦いはどんどんヒートアップしていった。
それにともない、岩窟堂は地獄観をさらに深めていく。
揺れる大地と震える大気が天井付近の鉄鎖を壊し、激動する地上に熱鉄の篝籠(かがりかご)を降らせはじめたのだ。彼女は半身をひねってそれを避けたが、落下の衝撃で炎が噴きあがり、彼女のからだを一瞬で包んでしまう。彼女はマントを大きくはためかせ、まとわりつく炎を瞬時に払いの

けた。炎は風圧によりとび散って消えたが、襲いくる火の手はこれだけではなかった。見上げれば、火の雨が次々と落ちてくる。

暗黒の地下世界で展開される幻想活劇に、少年はひどい眩暈を覚えていた。

それは自分が自分でなくなるような感覚だった。ともすれば、自分はすでにどこかその辺で死んでいるのではないかと疑いたくもなってしまう。この意識は死体から抜け出た幽体のものであり、肉体は巨怪に押し潰されたか、もしくは炎に焼かれて転がっているのではないだろうか。彼の理性が問いかける。だがしかし、彼の意志がそれを否定していた。この意識はたしかに自分のものだ。この体も。この感情も。

気づくと、彼は何かに導かれるように歩み出していた。

その手に、邪悪な剣をたずさえて……。

※※※

「まったく、なんという奇怪事だ」

岩窟堂を見下ろしながら、彼は感嘆として声をもらす。

怪事卿ことギプスウェルはいま、混沌の坩堝と化した岩窟堂の上層にひっそりとその身を隠していた。ここなら、巨怪の剛腕もさすがに届かない。また、巨怪に気づかれる危険性も低か

った。天井から吊るされた籠籠が近いため、多少ガチャガチャとうるさかったが、それは下層にいても同じだった。
彼は手にしたオペラグラスの歯車を回し、倍率を上げる。
二つの丸いレンズには二匹の怪物が鮮明に映し出されていた。
一匹は青色の巨大な超生物、もう一方は気品のある麗しき女流だ。
ふたりは岩窟堂の中心を通る広大な吹きぬけで烈々たるバトルを繰り広げている。
儀式こそ失敗したが、怪事卿はご満悦だった。なにしろ、異次元の超生物だけでなく、創世の五大魔術師の一柱までこの目で見ることができたのだ。彼女の洗練された美しさと強さ、そしてその肢体に秘められた並々ならぬオカルティズムに、彼はとりこだった。彼のミステリアスなふたつの瞳が篝火の炎に煽られて、より病的に輝いている。
そのとき、怪事卿の背後で黒い影が動いた。
ハッとしてふり返る。と、彼は微笑しながら言った。
「おぉ、きみも無事だったか、モアベルくん」
「……怪事卿……」
少年は奥歯を軋ませながら眼前の男を睨みつけていた。両手に握られたその剣が持ち主の明確な殺意を物語っている。崩れた大蛇の中から拾ってきたそれは少女の血で濡れていた。そしていまは、怪事卿の血を欲している。

「そんな物騒なものはおろしたまえ」
怪事卿は少年を諭した。が、少年は問答無用で怪事卿にとびかかった。
刃が空を切り裂き、怪事卿の頭にふれる。その瞬間、彼は半身をひるがえしていとも簡単に剣を避けていた。獲物を捕らえ損ねた刃は転落防止用の塀へと打ち下ろされ、耳障りな金属音を張り上げる。
「わたしを追ってここまで登ってきたのかね？」
少年は怪事卿の問いには答えず、剣を勢いよくよこに薙ぎ払った。すると、怪事卿は腰につけていたさやからすばやく自分の剣を引き抜き、少年の剣へと一直線に走らせる。剣と剣は激しくぶつかりあい、ふたりのあいだに火花を散らせた。
「気持ちは分かるがそう興奮しないでくれ」
「うるさい！　殺してやる！」
「そう言わず、一緒に世紀の大決戦を観賞しないかい？」
彼はそう言うと、ハッとしてオペラグラスを少年へと差し出した。
「そうだ、これを貸してあげよう。このオペラグラスは海の向こうの機械技術が発達した国で造られたものなんだ。使ったことがあるかい？　遠くのものが近くに見える。優れものだ。これを使えばここからでも彼女たちの交戦をまぢかで見る――」
「だまれ！」

少年がオペラグラスをはねのける。
彼の右目が疼いていた。灰色の瞳から何本もの赤い細流が生じ、ゆっくりと白目の部分を血走っていく。それはまるで幾何学的な文様が描かれていくかのような不思議な動きだった。彼の意識はその動きと連動し、憎しみの業炎で焼きつくされていく。少年は猛獣のごとく声を荒げ、ひたすら剣をふるい続けていた。
怪事卿はそんな彼に憐れみの目を向けていた。
彼は襲いくる斬撃をこともなげにあしらいながら、深いためいきをつく。
「もうやめたまえ。こんな殺し合いに、いったいなんの意味があるというのだね？」
されど、少年はとまらない。
怪事卿の台詞はもっともだった。だからこそ、彼は怒り狂っていたのだ。ぎりぎりと歯を食いしばり、剣の切っ先を復讐の炎で光らせる。その獰猛な連撃に、怪事卿はうんざりしながら首をふった。
「納得してもらえず、本当に残念だよ……」
そう言うが早いか、彼は腰のさやをはずして大きくふりぬく。
瞬間、はじけるような打音が響いた。
その痛ましい音が静まったとき、少年は地面にひざをついてくずおれていた。視界がチカチカと点滅し、眩暈にも似た不快な激痛が頭蓋のなかで反響していた。あの一刹那、怪事卿のさ

やは少年がふるった剣の軌道をずらしてからぶりさせただけに終わらず、そのまま少年のこめかみを綺麗に打ちぬいていたのだ。
脳を揺さぶる衝撃に、少年は苦鳴をもらしてうずくまる。
痛みと吐き気に全身が蝕まれていた。
だが、それだけじゃない。
少年の手が、彼の顔面を覆いかくしていく。震えるその指先は、右目のまわりに強く食いこんでいた。眼球が燃えるように熱い。眼窩の奥底から、何かがほとばしっていた。それは少年の内側から濁流のようにあふれだし、彼の右目を紫水晶（アメシスト）色に変貌させていく。と、彼はひときわ大きな咆哮を張り上げた。見ると、その瞳に亀裂が生じている。亀裂はどんどん深くなってゆき、やがて彼の瞳をふたつに割ったのだった。
常軌を逸した感覚に、少年はからだをのけぞらせる。
篝火の炎に照らされたその形相は鬼気迫る凄まじいものだった。
眼窩から流れ出した血によって、少年の顔の右半分が深紅色に染まりあがっていた。そしてその発生源に嵌めこまれた奇怪な右目の中で、分裂したふたつの瞳がクルクルと旋回しているのだ。旋回はおだやかであったが、一巡するたびに眩惑的なアメシストの怪炎を周囲へと噴き上げている。
怪事卿は言葉を失っていた。

彼はごくりとノドを鳴らし、ようやく、声をしぼり出す。
「その重瞳はまさか、眼球職人の魔眼かね？……」
「……殺してやる……殺して……殺……」
少年は正気を失っていた。
狂気じみた気迫に、怪事卿は全身をくまなく総毛立たせる。
「その類稀なる紫水晶色の輝き、前に文献で読んだことがある。どこだったかは忘れたが、ある国の王と同じものだ。彼はそのアメシストの魔眼により、死者を意のままにあやつることができたという。彼が従えた不死の屍人兵団は強力で、戦乱の最中いくつもの国を滅ぼしたと記述されていた……」
彼は顔をひきつらせながらも高らかに笑って言った。
「やはり君は奇縁を持っている。これは天命だよ」
両手を広げながら、彼は興奮して続ける。
「黄金船団を手中にした妖帝シェイラン、首を落とされてもなお戦い続けた不死身の老騎士バレリオ、大預言者グーラ、魔術王ランデルドゥーズ。この世に名を刻んだ超然覇者はみな、この世あらざる奇怪事との奇縁を持っていた。神魔に魅入られた者こそ選ばれし者なのだ。この世の枠を超え、新境地へと赴く権利を有する者。新たな歴史を紡ぐ義務を背負う者だ」
怪事卿はそこまで言って、ひと息おいた。

次いで十分な間をとり、少年に手をさしのべる。
「私と一緒にくる気はないかね？」
「……」
少年は黙したまま動かない。ただじっと、怪事卿を睨みつけている。
「君もいまさらあの孤児院に戻るつもりはないだろう。私なら君の身元などいくらでも用意できる。迷うことなどない。君は眼球職人という大いなる意思に選ばれたのだ。さぁ、我が盟友よ、ともに神の都を目指そう。ともに、偉大なる夢を成しとげようじゃないか」
「……偉大なる、夢……」
「そう、すべては神の計らいだ。運命が君を待っている」
「運命が決めたのならそれもいいでしょう。でも、その前に……」
少年が怪事卿にゆっくりと近づいてゆく。
血はいまだ眼窩からとめどなく流れ続けていた。気づけば、相対するふたりの足もとには大きな血だまりが広がっている。およそ、人が流して大丈夫な量ではない。本来であれば、とっくに意識を失っているはずだ。しかし、少年はいまや傀儡と化していた。彼はあふれでる血流を拭うこともせず、ただ、内なる衝動に身を任せている。
「ギプスウェルさん」
少年が静かにつぶやく。

と、彼はポケットから眼帯を取りだし、怪事卿の目の前で広げて見せた。
「僕の右目があなたの命を欲してる」
瞬間、怪事卿は苦鳴をあげてよろめいていた。
彼の脳はいま、激しく眩んでいた。処理したことのない過剰な情報が入りこみ、彼の視覚野を混乱させたのだ。そのすきに、少年は雄叫びを上げながら彼に体当たりをくらわせる。さすがの怪事卿もこれには体勢を崩さざるをえなかった。彼は大きくうしろに吹きとび、堀の上に勢いよく倒れこむ。と、相次ぐ地震の影響で脆くなっていたのか、怪事卿が倒れ伏した堀の部分が崩れはじめたのだった。
怪事卿が瓦礫とともに空中へと放りだされる。
彼は半壊した塀から突き出た鉄筋を咄嗟に掴み、なんとか一命をとりとめていた。
一時的に視力を失くしていたので下を見ることはできなかったが、下層では燃え盛る炎と黒煙が激しく渦を巻いていることがはっきりと分かっていた。それは吹きすさぶ熱風と巨怪の怒声、そして地を揺るがす激しい爆発音が雄弁に物語っている。落下すれば、この距離だ。まず命の保証はないだろう。
「人間は処理できる視界の情報量が決まってるそうですよ……」
頭上から、冷たい声が降ってくる。
怪事卿は眼痛をこらえ、両目を少しずつひらいていった。

ぼやけた視界に影がうつる。人のかたちをしたそれはどす黒く塗り潰されていたが、顔の反面にあいた穴からは世にも美麗なアメシストの輝きがゆらゆらと放たれていた。影はゆっくりと、また静かに動き、逆手に持った剣を高々と宙に掲げていく――その瞬間、歪む影の脳内で雷がはじけた。

少年の動きがにわかにとまる。

彼の目は極限まで見ひらかれていた。

（――選べ、我が器よ――）

いま、少年は右目に宿した魔眼より啓示を受けていた。

少年の魂へと突きつけられた究極の選択。もし、殺意に身をゆだねて相手を殺せば、魔眼は死霊魔術の異能を開眼させ、彼にネクロマンサーとしての称号を与えるだろう。だが逆に殺意を拒絶し、相手を赦せば、魔眼は黄泉がえりの異能を開眼させ、彼に一回かぎりの神の奇跡を与えてくれる。

それは少年の今後を左右する重大な分岐点だった。

彼は煩悶し、呻き声をあげる。

選ぶべきは明白だった。この男を殺して得られる力に魅力など感じない。されど、少年の内側に逆巻く邪悪な業炎は彼の理性を焼き焦がしていた。大切な人をふたりも奪われた苦しみは並々ならず、剣を握る少年の手に力を込めさせていく。

彼が憎い。とほうもなく憎い。
ここで彼を殺して満たされるのはただの一時的な気休めでしかないということも分かっていた。その場かぎりの慰めだ。しかしそれでもとまらなかった。このまま気の迷いに流されたかった。少年の剣は標的へと狙いを定めていき、そして、いっきにふりおろす。
が、剣は頭上から離れない。
少年は愕然としてからだを硬直させていた。
彼の目の前に、崩れかけた塀の上に、弟が、セロが立っていたのだ。それは極限状態に立たされたものが見る幻覚だったのかもしれない。しかしながら、彼の目にうつる弟の姿は驚くほど現実感を持っており、明確にその意思を表示していた。セロは両手を広げて少年の前に立ちはだかり、顔を左右にふっていたのだ。その姿はまさしく少年の行動を制止しているに違いなかった。
「……そんな……セロ……」
「……少年よ、どうしたのだね？……」
腕一本で塀にぶらさがっている怪事卿が怪訝そうに訊く。彼の目にはセロの姿などうつっていなかった。そこには剣を掲げて立ちつくす少年がいるだけで、ほかには誰もいない。それがあまりに不審だったため、怪事卿は思わず問いかけていたのだ。
「……セロ、そこをどいてくれ……」

少年は怪事卿を無視して弟へと語りかける。
「……きみの、きみたちの仇を討つチャンスなんだ……」
彼が泣きながら訴える。しかし、弟は兄の目の前に立ちはだかり続けた。弟の顔には包帯が巻かれているためその表情は見えなかったが、どうしてか、悲しんでいることがはっきりと伝わってくる。
「……どうして、行かせてくれないんだ……」
少年は剣を掲げる手を震わせる。
と、そのとき、彼の背中に誰かの指先がそっとふれた。ふりむかずとも分かる。懐かしき少女、クーイのぬくもりが背後にただよっていた。彼女の手が、少年の剣をにぎる両手に優しく重ねられていく。あたたかな手のひらは少年のつめたい手を押し下げてゆき、そして彼の耳もとで彼女は言った。
もう、じゅうぶんだよ。
その声を聞いた瞬間、少年は剣を地面に落としていた。
次いで体から力がぬけ落ち、その場にへたりこむ。彼はすぐにうしろをふり向いたが、そこにクーイの姿はなかった。気づけば、目の前に立っていたはずのセロの姿も消えている。岩窟堂に広がる円形の通路には、涙を流してひざをつく少年と、絶体絶命の怪事卿のふたりしかいなかった。

少年は涙でにじむ視界をぬぐい、怪事卿の腕をつかむ。
怪事卿はそんな少年の行動に驚いていたが、やがて笑いながら言った。
「さすがだな、我が友人よ。まったく、君は見上げた男だ」
「誰が友人ですか……勝手に決めないでください」
ぶつくさと言いながら、少年は怪事卿を引きあげようと力を込める。とはいえ、こどもの力で大人の体重を引きあげるのは難しかった。怪事卿のからだはいっこうに持ち上がらない。それでも、彼はあきらめなかった。彼は歯を軋ませながら、低い声をしぼり出す。
そんな少年の姿に居たたまれず、怪事卿は言う。
「気持ちは嬉しいが、君の力では無理だ」
「黙って助けられてください」
少年は無愛想に言いかえした。実を言うと、彼を助けることに心の底から賛成しているわけではなかった。それでも、彼を許すと決めたのだ。見捨てるわけにはいかない。少年は汗をたらしながら、さらに力を入れる。が、怪事卿のからだはやはり持ち上がらなかった。足場は不穏な音を立てはじめている。長くはもたないだろう。
そうこうしていると、怪事卿がふとなにかを決断したかのようにつぶやいた。
「あきらめるつもりはない。が、この命運、ひとまず天にあずけよう」
「なにか言いましたか？」

少年が怪訝そうに訊きかえす。
怪事卿はいつもの微笑を浮かべていた。
そして自らの胸に片手をあてながら、彼は告げる。
「それではモアベルくん、また会う日まで、ごきげんよう」
怪事卿は少年の手を無理やりふりほどく。彼は悲鳴ひとつ上げずに岩窟堂の下層へと落下していった。その姿はすぐに逆まく炎の中へと消えていったが、その最後の最後の瞬間まで、彼が微笑を崩すことはなかった。

※※※

少年が岩窟堂の最下層に戻ると、デラとクェルの戦いもすでに終結を迎えていた。
崩壊した広間には上空から落下した鉄鎖と篝籠がいくつも転がっていた。漏れ出した油が一時は大きな火災を招いていたが、いまではだいぶ鎮火し、燻る灰煙と、焚火ていどの炎がそこらでちらちらと燃えているていどにまで落ち着いていた。
「決着はついたのかい？」
少年が激戦の傷跡を眺めていると、どこからともなくデラは現れた。
彼女の問いかけに、彼はやるせない微笑みで答える。

「はい、あまり釈然としないかたちですが……」
異次元の魔物を呼び出した血泉は静かなものだった。そこに浸かる巨怪もまたうなだれるようにして活動を停止しており、いまやただの樹木と化している。少年は崩れかけた階段を上がり、血泉の縁へと登っていった。血泉の縁からは巨怪の足らしき樹木の根がたくさん這い出ており、彼はそれを避けながら火口の入り口へと向かう。そして頂上に着くと、彼は対岸にそびえるクェルの巨躯にあらためて圧倒された。その光景はまるで、湖に突き刺さった巨大な墓標のようだった。
「デラさん、異次元へと続く扉っていうのは？」
「役目を果たし、すでに閉じられたよ」
少年のうしろで、彼女は言う。
それを聞き、彼は血泉をのぞきこんだ。湖面は赤かったが透きとおっており、少年の顔を鏡のようにうつしていた。ここに、いくつもの命と魂が溶けている。そう確信して、少年は湖面へと両手を差しこんだ。そして、手のひらでその液体をすくいとる。液体は思った以上にさらさらしており、光を反射させながら少年の指のあいだからこぼれ落ちていった。水のようで水ではない。それはまるでこの世とあの世をつなぐ未知の流体だった。
少年は目をつむる。
と、世界が闇に包まれる。

静かで冷たい、秘密の小部屋だ。
彼だけが入室を許された、名もなき部屋。
「――人生とは、選択の連続だ――」
デラが言う。はるか昔、どこかの誰かが言った言葉らしい。
「悩み、苦しみ、身を引き裂かれるような思いで決断した君は、悲しいことにまた選ばなければならない。どちらを選んでも君は苦しむだろう。不可視の十字架を背負いながら生きてゆくのだから。だがそれでも、君は選ばなければならない」
「えぇ、わかってます……」
少年は目をつむったまま答えた。
名もなき部屋はあいかわらず凪いでいたが、やがてどこからともなくアメシストに輝く光の帯が現れる。帯は本数を増やしながらゆっくりと動き続け、徐々に『なにか』をかたちづくっていった。
少年は思い描く。
――髪はどんな色だったか。
――声はどんな音だったか。
――香りは、そして肌のぬくもりは。
その美しきアメシストの中に、すべてを込めていく。

すると、暗闇によこ一線、まぶしい亀裂が走っていった。同時に、アメシストの聖気がそのすきまから流れ落ちていく。名もなき部屋はその存在を消してゆき、気づけば、眼前にもとの世界が現れていた。

少年の目から涙がひと粒こぼれていく。

涙滴は少年のほほを伝い、そのまま湖面へと落ちていった。

水面に波紋がいくつも生じ、複雑な文様を描いてゆく。それは少年の右目に刻まれた魔眼の紋章と同じものだった。文様は完成するとアメシストの聖気を放ち、その中心部から円筒形の不思議な物体を浮上させていく。物体はどうやら箱らしく、表面に角張った波線をたてに走らせると、そこを起点に左右へとすべるように開いていった。

そして、箱の中から少女が現れる。

彼女は寝ぼけ眼をこすっていたが、その視界に少年の姿をとらえると、すぐにふらふらと歩きはじめた。彼女の足どりは頼りなかったが、水面がそれをカバーしていた。水面は少女の足どりを優しく受けとめ、彼女を岸に向かって送り出している。少女は少年のもとまでたどりつくと、彼の腕の中へと倒れこみ、ゆっくりと目を覚ましていくのだった。

「……モ……ア……」

「……クーイ！」

少年は力いっぱい彼女を抱きしめた。

※※※

「誰がために鐘はなる……か」

館の屋上で、デラは美しい鐘の音を聴きながらそうつぶやいた。

クーイが復活したあと、三人は地下迷宮を抜け出て屋上へと足を運んだ。それは少年の申し出だった。弟の死をちゃんと弔ってあげたかったのだ。そこで、彼は館の門をくぐったさいに見た屋上の銀の鐘を思い出し、こうして鐘を鳴らしにきたというわけだ。

外に出るとちょうど夜が明けるところで、まぶしい太陽が昇りはじめていた。一夜の悪夢は終わったのだ。太陽の暖かな光が差しこむ中で、彼は鎮魂の儀を続けた。

「ごめんな、セロ……」

つぶやきながら、少年は鐘を撞く。

自分は弟を守ってやることができなかった。そのうえ、魔眼の力をクーイに使ってしまったのだ。その選択に理屈をつけるのは難しかった。しかしあえて述べるとしたら、それは自分が背負うべきは弟を見捨てた罪だと思ったからだ。それは、二度と目を背けてはいけない彼だけの罪。自分のために消えた命を救済し、自分のせいで消えた命を背負って生きる。

少年は極限状態のなかでそう思ったのだ。

「僕はもう、君から逃げない」
潤んだ瞳で、少年は再び鐘を鳴らす。
と、天に向かってまたひとつ音色の花火が打ちあがった。銀色に輝く霊鐘は少年が紐を引くたびに澄んだ音色を周囲に発生させた。そしてその繊細な残響音はきらめきながら空の彼方へと吸いこまれていく。まるで、魂が天へと還っていくかのように……。
少年は祈りながら鐘を鳴らす。
何度も、何度も、鐘を鳴らし続ける。
そしてそのいくど目かのとき、はたと少年の手は動きをとめた。
目の前にセロが立っていたのだ。あの大災禍の中で見た弟の顔には汚れた包帯が巻かれていたが、いまはその幼い顔を朝焼けにさらしていた。セロはかける言葉を見失う兄の挙動をおかしそうに笑うと、ゆっくりとふたつのまぶたをひらいていく。そしてその穢れなき瞳にボロボロの少年の姿が入りこんだ瞬間、彼は空の中に消えていた。
伸ばした手を途中でとめて、少年は空を見上げる。
「我慢することはないよ」
デラの言葉に促され、少年はとめどなく涙を流し続けた。彼は頭上に広がる蒼穹を見すえながら、両手をかたくにぎりしめる。すると、そんな彼のよこに少女がやってくる。見ると、彼女もまた目尻に涙を浮かべていた。ふたりはうなづき合い、そして、最後の鐘の音をともに打

ち鳴らすのだった。
銀色が、大空に溶けていく。
その音色はことさらに長く響いていた。
が、その美しき余韻が不意に打ち消される。
少年たちの眼前に、突如として謎の黒い影が出現したのだ。床にできた影が急激に膨張しはじめ、ぐにょぐにょとかたちを変えながら立体となっていく。すると、その影の中から見覚えのある緑衣のローブが卒然と現れたのだった。まわりには虹色に輝く火球が発生しており、それは動揺するふたりに向かって勢いよく飛んでいった。
「あぶない！」
デラの声が響く。
刹那、七色の凶悪な輝きが炸裂し、あたり一帯に爆風と爆炎が噴き荒れる。
立ちこめる黒煙と飛びちる虹炎（こうえん）がその場のいっさいを隠していた。
黒煙が風にさらわれ視界が徐々に晴れていくと、そこには倒れる少女を抱きしめている少年と、彼らの前で銀飾のスプーンを掲げる眼球職人の姿があった。どうやらデラがふたりの盾になってくれたらしい。とはいえ、かなりぎりぎりだったのだろう。彼女のマントのはしが少しだけ虹色の炎で焼きちぎられていた。
デラが前を向いたまま、うしろのふたりへ呼びかける。

「大丈夫かい？　ふたりとも」
「はい、助かりました」
「びっくりしたぁ」
少女は少年に支えられながら尻もちをついていた。そしてその愛らしい目をくるくると回している。ほとばしった強烈な虹色に目がくらんでいたのだ。彼女は頭をふって立ちあがるとまぶたをこすり、あらためて眼前の怪人を視界にとらえる。と、彼女はそのあまりの奇怪さにすっとんきょうな声で叫んでいた。
「なにあれ！　おばけ？　気持ち悪い！」
「あいつはたしか、ヘイロンとかいう協会の……」
少年は思い出す。あの怪人はたしか司教と呼ばれていた男だ。協会の上位の役職についているようだが、その正体はまったく以て不明。謎の存在だった。儀式が失敗し、巨怪が召喚されて以降は岩窟堂内が大混乱だったため、奴のことを気にする余裕もなかったが、いまにして思えば、奴こそが諸悪の根源とも言える。
少年のノドがゴクリと鳴る。
ヘイロンはしばし黙したままデラと対峙していた。
しかし次の瞬間、彼のマンダラ模様の目が激しくスパークし、回転する。
同時に、彼のまわりに虹色の火球がいくつも出現し、鬼火のように浮遊しはじめた。

「殺る気まんまんだね――」
デラがヘイロンへと突進していく。
ふたりはごく近い間合いで激しい攻防を繰り広げた。
銀飾のスプーンが棒状に変形し、ヘイロンめがけてふり下ろされる。が、その瞬間、ヘイロンは厚みを失って影そのものになってしまう。スプーンが空ぶりすると、ヘイロンは再び厚みを取りもどし、デラの背後にすばやく現れた。マンダラ眼の怪人はそのあいだも火球を産み出し続けており、虹色の鬼火は意志を持っているかのように彼女のことを追っかけていく。至近距離から発射されるそれらは自動追尾のような動きと相まってとてもやっかいだった。デラはそれらをスプーンで相殺しながらヘイロンへと攻撃をしかけ続けている。
されど、彼女の攻撃はいっこうに当たらなかった。
銀飾のスプーンがまた敵のからだを捕らえ損ねてしまう。
ヘイロンは立体と平面とを自由に行き来できるため、彼女の攻撃を察知するとすぐに三次元の世界から消えてしまうのだ。そこに加えて、四方八方から襲いくる鬼火の波状攻撃はすさまじく、どんどんその数を増やしていく。デラはそれらを見事にさばいていたが、だんだんと手数の差が出はじめ、回避も防御も追いつかなくなってきていた。そしてそんな彼女の一瞬のすきをつき、ヘイロンがひときわ大きい虹色の炎弾を放つ。
デラはハッとして銀飾のスプーンを揮った。

するどい銀光がほとばしる。
棒状のスプーンが鞭のように変形し、そのしなやかな先端を近くに建てられた尖塔へと巻きつけていく。デラは駆け出すと同時に大きく跳躍していた。炎弾が爆ぜ、爆風が彼女のジャンプをあと押しする。と、彼女のからだは尖塔を軸にして弧を描くように動いていった。その速度はかなりのもので、銀飾のスプーンでなければ間違いなくちぎれていただろう。彼女はその勢いのまま尖塔をぐるりと一周し、ヘイロンのうしろにまわり込む。
彼女がスプーンを棒状に戻し、鮮やかにふり下ろす。
その寸前、彼女のからだは何本もの黒い槍によって串刺しにされていた。
見ると、ヘイロンが佇む地面には水たまりのような影が広がっており、その一カ所から長く鋭いトゲがいくつも伸びていた。トゲはデラのからだに穴をあけて彼女をしばし空中に張りつけていたが、やがて溶けるように影の中へと戻っていく。彼女のからだは力なく落下し、石畳の上へと倒れこんだ。
「デラさん！」
少年が叫び、駆けよろうとする。
だがしかし、彼はふとその足をとめた。なにかようすが変だった。地面に転がった彼女の姿はたしかに彼女のものだったが、その質感がどうもおかしい。なんだか、ゆらぎが走っているように見えるのだ。まるで銀色の光を反射しているかのように……。それに気づいたとき、違

和感は文字どおり音を立てて崩れ去った。彼女のからだが、ガラス細工のように砕けちって消えたのだ。

そして、怪人の背後で黒衣が翼然として風になびく。

ヘイロンはハッとしてふり向いた。

そこには、紫水晶色に輝くひとりの妖艶な魔女が佇んでいた。彼女は黒いキャペリンハットを目深にかぶり、しなやかなその手には類稀なる銀飾のスプーンを、いや、いまや聖気をまとった一本の瀟洒な銀剣をにぎっていた。彼女はその瑞々しいくちびるを寝そべる三日月のように歪めて言う。

「剣（スプーン）の名はシルヴィア。以後、お見知りおきを」

瞬間、彼女は銀剣を怪人のマンダラ眼へとつき刺した。

ヘイロンがけたたましい悲鳴をあげる。その金切り声は強烈で、鼓膜を通りこして脳に直接つき刺さるほどだった。怪人は悶え苦しみながら全身をぐにゃぐにゃと変形させていく。えぐられたマンダラ眼からは虹色の炎がほとばしり、また床に広がる影からは無数の黒い手が這い出してきてその五指をわらわらと蠢かせていた。そして黒い手が影の中に引っこむと、今度は巨大な黒い頭蓋骨が現れる。頭蓋骨は口を大きくあけており、歯列の中でのたうちまわる怪人の姿はさながら舌のようだった。

少年と少女は怪人の発狂に恐怖を抱いていた。

なんという惨烈な光景だろう。まさしく、凝縮されたナイトメアだ。
ふたりは身を寄せあいながら事態が収束するのを待っていたが、なかなか終わりは訪れなかった。むしろ、怪人の苦悶はさらなる異変を引き起こしはじめていた。ヘイロンの残されたマンダラ眼がにわかに高速回転を開始し、その色を虹色から赤色へと変化させたのだ。そしてまた驚くべきことに、回転はフードにたまった闇の中でさらに速くなり、そのまま車輪のごとく潰れたはずの眼窩へと移動したのだ。気づけば、たったいま移動したはずのマンダラ眼もまたそこにある。
みな、目を疑っていた。
いったいなにが起こっているのか。
理屈を求めて観察してみると、とんでもないことが分かった。
ヘイロンの目は球体ではなく平面だったのだ。つまり、眼球と思っていたのは本当にただのマンダラ模様でしかなかった。ふたつの魔法陣が流動する闇の中で目のようにふるまっていたのだ。高速回転は魔法陣をその場所に焼きつけてコピーする行為で、移動した魔法陣は壊れた魔法陣を上書きしてもとの状態に戻したという感じだろう。
これは生き物なのだろうか。
少年は戦慄し、言葉を失っていた。
が、それを嘲笑うかのごとく怪人はさらに変異を続ける。

ヘイロンの赤い両目がさきと同じように高速回転し、魔法陣の量産をはじめていた。魔法陣は二個から四個へ、四個から八個へ、そして八個から十六個へと見る見るその数を増やしていく。怪人は魔法陣が増えるのに合わせて自身のからだも分裂させ、最終的に、彼は自分と同じ見た目の個体を十六体もつくりあげていた。彼らの胴体はすべて根元でつながっており、ぐねぐねと動くその見た目はまるでイソギンチャクだ。異常形態の怪人は頭蓋骨の口の中だけでは収まりきらず、それぞれ両目の眼窩からもからだを這い出させていた。

そして三十二個の魔法陣が赫赫として燃えあがる。

ギラギラと輝くそれらは自身の眼前に赤い光線を放っていた。

すると、三十二本の光線が一点に集中し、大きなエネルギーボールを出現させる。

「デラさん、これ、なんだかやばそうですよ……」

「わたしもそう思う……」

「ふたりとも、うしろにさがっていてくれ」

瞬間、怪人のエネルギーボールが超速で光線を発射する。それとまったく同時に、デラのスプーンは円形の盾へとフォルムチェンジしていた。銀飾の盾が光線をはじき、真正面から受け止める。しかし、光線の勢いもまた止まらない。無機質な赤い光は少しずつその火力を上げており、はじかれたエネルギーが強烈な閃光となって盾の周囲へと流れていた。

「これは少々まずいかもしれないね……」

デラが口の端を吊り上げる。
その顔には若干の焦りが見えていた。
信じがたい光景だった。マンダラ眼の怪人ヘイロンも甚だ常軌を逸した不気味な存在であったが、それ以上に、この世界の創造神である眼球職人が苦戦を強いられるなど、少年にはまるで想像の及ばぬ展開だった。彼は彼女のはじめて見せるその表情に強い不安を感じざるを得なかった。そして、その不安がいま、絶望に変わる。
銀飾の盾が光線によってはじかれたのだ。
耳朶を打つ爆発音が轟き、地面が激しくゆれ動く。屋上全体が崩れるように中央付近へとかたむき、少年は少女と一緒にその場へと倒れ込んでいた。その瞬間、彼らの頭上ぎりぎりを赤い光線が通過していく。もしあと少しでも軌道がずれていたら、おそらく首から上が消しとんでいただろう。
少年は急いで立ち上がり、状況を確認する。
まずヘイロンの姿がどこにもない。というより、何も見えなかった。白い煙がもうもうとあたり一帯に立ちのぼっていたのだ。視界の悪さが緊張感を生み、少年の肌をじりじりと焼いてゆく。怪人はどこへ行ったのか。自滅したのか。それともまだ自分たちを狙っているのか。いろいろな思考が頭の中をよぎっていく。
煙幕は少しずつ晴れていった。

だんだんと、その全貌を明らかにしていく。
屋上の、奴のいた場所に何かが落下していた。その重量はかなりのものらしく、落下地点を中心に大きな凹みが生じている。石畳を砕き、屋上の一角を陥没させたその正体不明の物体は鳥籠だった。真っ黒で酷薄とした鳥籠が、怪人を圧し潰して地面に埋まっていたのだ。
「オンボロバード！」
「よっ、記憶は戻ったか？」
少年に呼びかけられ、鳥籠がふわりと宙に浮く。
鳥籠は籠の内部でパタパタと可愛らしい音を立てながら彼らのもとに飛んでいった。
「遅かったじゃないか」
「そう言うな。こっちも言われたとおり急いできたんだ」
オンボロバードはそう言うと、鳥籠の下部につくられた小さな引き出しを内部から押し出した。とび出てきた引き出しの中には、宝石がひとつ入っている。それは現世のものとは思えぬほどの美麗な結晶だった。曲面は非常になめらかで、観念的なイデア界にしか存在しないはずの真球だということが理屈を超えて伝わってきた。表面は完璧な無色透明であったが、内側にはアメシストの柔らかな幻光が閉じこめられており、じっと眺めていると、その光の魔力に誘われてクリスタルの中に吸いこまれそうになってしまう。
「ほらよ、頼まれてたブツだ」

「ありがとう。たすかったよ。危ないところだったんだ」
「まったく、俺にこんな雑用たのむなよな」
「いいじゃないか。私と君の仲だろう」
少年がふたりのやりとりを眺めていると、彼の袖をクーイがひっぱった。空を飛ぶしゃべる鳥籠が不思議でしょうがないらしい。少年は説明しようと思ったが、残念ながらそんなひまはなかった。オンボロバードがあけた大きな穴から、怪人の黒い触手たちが勢いよく這い出てきたのだ。圧し潰されたやつのからだは流動体だったため、かたちこそ崩れたがたいしたダメージはなかったようだ。
ヘイロンが蠢き、再び三十二個の魔法陣を輝かせはじめる。
その面妖なさまを見て、オンボロバードは顔を、いや、声をしかめた。
「うわっ、なんだよ、こいつ。やべぇなおい」
「デラさん！　ど、どうしましょう⁉」
「大丈夫、まかせてくれ――」
デラは言うや否や、オンボロバードから受けとった宝石を天高く持ち上げた。
その瞬間、宝石がにわかに発光し、周囲に不思議な風を発生させていく。気流は彼女の美しい長髪を巻き上げ、神の秘められし素顔をさらけ出していった。艶やかなくちびる、凛とした小高い鼻梁、気高いやわ肌に長く気品のあるまつ毛、そのどれもが美術品のように美しい。だ

がしかし、彼女の目だけはいまだ神秘のベールに包まれていた。なぜなら、彼女の両目には瞳がなく、ぽっかりと虚ろな空洞がひらいているだけだったのだ。
そしてその空洞がいま、光を呼びこんでいた。
宝石が流体となってかたちを失い、彼女の眼窩に取り込まれていく。
と、彼女の両目に、アメシストにひかり輝く壮麗な幻光が宿ったのだった。
「あれが、デラさんの目……」
少年はそのあまりの美しさに見惚れていた。
「あいつは自分の力をこの世界にバラまいたせいで弱体化しちまってな。定期的に魔力をチャージしないとすぐにバテちまうのさ。でも、フルパワーになったあいつの強さはなかなかのもんだぞ。ほら、よく見とけ」
オンボロバードがそう言って少年の背中をポンと叩く。
そのかたわらで、ヘイロンはうねり狂っていた。空を背にした巨大な流動体は殺意のかたまりだった。十六本の黒い大蛇が絡みあうようなその見てくれはさながら邪神そのものだ。怪人は激情に駆られ、マンダラ模様を耀かせながらデラへといっせいに襲いかかっていく。
それに対し、デラは銀飾のスプーンを傑然としてかまえた。
――刹那、時間が凍りつく。
極大まで緩慢となった世界の中で、デラのスプーンがヘイロンの邪悪な姿をうつしとってい

く。と、空宙の一点で閃光が生じ、大爆発が起こった。ほとばしる紫水晶色の雷霆（らいてい）が怪人の全身を怒涛の勢いで破壊し、凍りついた時間と一緒に焼きつくしていく。

まさに、紫電一閃。

すべてが一瞬のできごとだった。

アメシストの雷撃によりマンダラ眼の怪人は完全に消滅し、そのあとには消炭ひとつ残ってはいなかった。激しい焼け跡からは不思議な甘い匂いがほのかに香っている。

少年と少女は驚きのあまり口をあけたまま茫然と立ちつくしていた。

すると、デラがふりかえってニヤリと微笑する。

彼女は銀飾のスプーンを指でくるくると回しながら言った。

「さて、そろそろ帰ろうか」

――――試読版（了）

＜作者より＞
試読版をお読みいただきまして誠にありがとうございました。本作の続きや、作中で語られなかった謎が気になる方はぜひ有料版をお求めください。

なお、第 4 章「眼球職人デラ」では町にもどった少年たちの縁深きそれからの話が語られます。そして終章「獣ノ微睡火」においては、夜の帳がおりた月夜の森を舞台に、いまだ語られざるすべての謎が明かされます。眼球職人とはいったい何者なのか。マンダラ眼の怪人ヘイロンの正体とは、そして人間が創造された理由とは……。物語の核心部が最後の 20P に凝縮されています。心の底から必見です。

＜禁止事項について＞
無断転載・複製・複写・インターネット上への掲載はご遠慮ください。悪質な違法公開につきましてはサーバー会社への通報及び損害賠償の請求等相応の対応をとらせて頂きます。

※本作はフィクションです。本作に登場する人物や宗教、言語等は現実のものといっさい関係ありません。